

なんてこったい!?

松井菜桜子



PHOTO & CGWORK 菊池通隆

PHOTO



PHOTO



PHOTO



「遅刻をしない、というのは、役者として最低限の基本である」

養成所時代からこう叩（たた）き込まれていたにもかかわらず、よりによって新人の頃の何年間か、私は「遅刻の三大女王のひとり」という不名誉な名前をちょうだいしている（ちなみにあとのふたり、K嬢、C嬢は私の親友だったりする。類は友を呼ぶのだろうか？）、所属事務所でも赤丸付きの要注意人物であった。

遅刻だけならまだいいが（いやっ、ちっとも良くないです。すいません。反省してます）、スケジュールが完璧に頭からきれいさっぱり飛んでしまってることすらあったのだ。

その日の二本目の仕事をすっかり忘れて家へ帰ってしまい、のんびりお風呂に浸（つ）かっていたら、

「松井さん早くスタジオへ行ってくださいっ、皆さん待ってますっ！」

と泣きそうな声でマネージャーから電話がかかってくる、なんてことを二、三回やっている。

CMナレーションの仕事で、「アオイスタジオ」へ行くはずのところを「朝日録音スタジオ」へ行ってしまい、間違いに気づいてタクシーを飛ばしたのだが結局、大遅刻になってしまったことがあった。

「新橋と六本木のスタジオを、どこをどうやったら間違えられるのか？」

マネージャーに突っ込まれて、はたと気づいた私は、

「たぶん、アオイも朝日も『あ』で始まるからでは？」

とマジで答え、あきれられてしまった。

「なんで私たちは、いくら怒られても遅刻してしまうのだろう？」

その昔、三大女王で話し合ったことがある。

「あっ、このままいくと間違いなく遅刻するなあと思うと、なんだか妙に落ち着いちゃって、『ふうー』ってお茶でもすすりたくなるときがあるのよねえ」

遠い目をしてC嬢は言う。

「そうそうっ、わかる！　なぜか焦らなくちゃいけないときほど、そんな気持になるのよねえ、なんなんだろ、あれは？」

マネージャーが聞いたら「ふざけんなっ！」と怒られそうな私の発言。眠り姫と呼ばれているK嬢は、相変わらずのおっとりした口調でいいわけをした。

「だってえ、目覚ましを朝、自分で無意識に止めていることに気づかないくらい爆睡いしちゃってるんだもの」。まさしく、K嬢には「爆睡」という言葉がふさわしい。

彼女はイベントで地方へ行ったときに、ホテルの部屋へ入ってドアを閉めたとたん、グワーっと襲って来た眠気に勝てず、三步先のベッドへたどり着く前にバタッと床に倒れてしまい、そのまま朝まで眠りこけて、翌日、絨毯（じゅうたん）の模様が付いたホッペでロビーに現れたことがある。

またあるときは、駅の改札口を出たところで歩きながら寝てしまい、道路の電柱にしたたかに頭を打って目が覚めた、という。

そして私が、彼女の「眠り姫」たるゆえんを目の当たりに確認したのは、この三人で朝まで語り明かしたときのことだった。

「お腹が空いたから、お洒落にホテルの朝食でも食べに行こう」と私たちは早朝からやっているレストランに入った。

食事中、K嬢が何ごとか思い出したのか、

「そうそう。ねえ、ちょっと聞いてえ、この間ねえ」

と話し始めた。

「うんうん」

向かいに座っていたC嬢と私は、箸を止めて頷いた。

するといきなりっ！ K嬢は「ベシッ」と、自分のオートミールに顔を突っ込み、スプーンを持ったまま皿の中で眠ってしまったのだ。

C嬢と私は思わず、「なっ、何が起こったの!？」と、顔を見合わせた。

これが仲間内では有名な「今しゃべってた女がもう寝てる」事件である。

「K嬢のことはけっこう皆、しょうがねえなあって笑って許してくれるのよ。いつも目の下にクマ作ってるし、色が白いから具合悪そうに見えるしさあ、必死で起きて来ましてっていう悲壮な感じがして得だよねえ。その点私なんか、自分が悪いのに『こんな不便な所にスタジオ作ったの誰よ!』とか、つい人のせいにして、ふてぶてしい態度になっちゃうから損なのよねえ」

私がしみじみしていると、

「あーら、その昔、松井さんはそのふてぶてしさで得をしたことあったんじゃないっけえ？」

とK嬢が切り返してきた。

そういえば、そんなこともあったっけ。

その日も、私はアニメのテレビシリーズのオーディションがあるのをすっかり忘れて、一本目の仕事を終えてから（朝の十時開始の三十分アニメの録音は普通、午後二時には終了する）、ショッピングをし、友人と食事をして深夜に帰宅してしまったのだった。

家へ着いて留守電を聞くと、

「松井さーんっ、いませんかあーっ、今年後六時です、オーディション、あるの忘れてまーすっ、至急連絡してくださーいっ！」

「松井さーんっ、松井さーんっ、お願いっ、連絡くださーいっ！」

とマネージャーが叫んでいるのが何回も入っていた。そして最後には暗い声で、

「もう、諦（あきら）めました。……明日、電話待っています」

という恨めしそうなメッセージで終わっている。

「ヤバ〜っ、またやってしまった！」

後悔先に立たず。慌ててももう遅い。

社長の吊り上った目を想像してゾッとなりつつ、翌朝、謝罪の電話を入れると、意外な答え

が返ってきた。

「お情けで今日、最後にひとりだけオーディションしてくれるそうだから、行って来るように」

「そんなもの、むこうだって気を悪くしてるのに、受けたって受かるわけじゃない」

私はひとりブツブツ言いながら、そのオーディション会場のスタジオへの急な坂を汗を拭き拭き上がって行った。

「ヒィ〜っ、日射病で死ぬうー！」

夏真っ盛りの八月の午後だったから、そりゃあもうクソ暑かったし、こんな勾配（こうばい）のきつい坂道を、受かるはずのないオーディションのためにエッチラオッチラ歩いている自分に、だんだん腹が立ってイライラしてきた。こういうとき悪い癖で、すぐ自暴自棄になって、全宇宙ごとブツ飛ばしてしまいたくなるのだ。いけない私……。

しかし物事というのは最後までわからないものである。その不機嫌な顔したまま、ふてぶてしくセリフを読んだのが、受けた役の「生意気で性格悪い女の子」のキャラクターにぴったりだったらしく、私はまんまと合格してしまったのだ。

これだから遅刻はやめられない（っていうのは真っ赤なウソです！ 関係者の皆さま、もうしませんっ、ほんとです。松井は生まれ変わりましたっ。もう遅刻は絶対しませんっ……たぶん。だってえ、私っ、電車の人身事故や車両事故に遭いやすい体質なんです。これほんとっ。でもお、それ以外は遅刻しないはずです！ いやあ、しなけりゃいいなど。きつとしないんじゃないかなあ、しないと思うよー。しないことを切に祈りたいっ！）。

ちなみに、今この業界でどんな「遅刻のいいわけ」が流行っているかご紹介しよう。

「車が込んじゃって」

だと、東京の末期的交通渋滞を知ってて車に乗るとは「このバカ者っ！」と一喝されてしまう恐れがあるので、そういうときは、

「電車が込んじゃって」

というのが有効だ。相手は一瞬、

「ふーん」

と煙（けむ）に巻かれ、

「あっ、なんだそれっ」

と気づいたあとは笑ってごまかす、という手の込んだ（どこが？）いいわけである。

もうひとつ、

「外国人に道を聞かれちゃって」

というのがある。これは日本人の外国人コンプレックスをグサッと突きながら、

「国際親善のためならしょうがないよねっ」

という気を相手に起こさせるという、奥深〜い（どこがじゃ！）いいわけである。

あなたは、どっちを試してみます？

変な仕事

声優の仕事というと、アニメや洋画の吹き替えだけだと思っている方が多いだろうが、それは意外と多岐にわたっていて、テレビやラジオのCMや番組ナレーション、CD・ラジオドラマ、アニメ等の主題歌や挿入歌のレコーディング、サイン会、アニメ誌の取材を受けたり、イベントのゲストや司会、社員教育ビデオに出演したり（顔出しと呼ばれる）することもある。つくづく、なんでも屋だなあと感じてしまう。まっ、いろいろあるから面白い、との言えるのだが。

友人の声優は、街中（まちなか）でみかんを一個ずつ無料で配る仕事をやらされたとき、「何がイヤって、タスキに『みかん娘』って大きく書いてあったのが恥ずかしかった」と言っていた。風変わりな仕事というのは、プロダクションに入りたての新人のときにやらされることが多い。

私の場合もそうだった。

仕事の内容がよくわからないことに多少の不安を感じたまま、スタッフの男の人数人と、私はバンに乗っていた。

たしか、カラオケのビデオを撮る顔出しの仕事で、マネージャーの言葉を借りれば、「あっという間に終わる」はず、であった。

着いた場所は、郊外にある大きな団地の一室だった。その部屋の住人がスタッフと知り合いで、半日貸してくれたらしい。

主婦らしい赤ちゃんを抱いたその住人がドアを開けてくれたとき、私は内心ホッとした。だって新人の私にはマネージャーは付いてきていないわ、スタッフは全員男だわ、知らない家に連れて来られるわ、自意識過剰になって、けっこう緊張していたのである。

仕事はいわゆるよくお店で流しているカラオケビデオの撮影で、小林幸子さんの『女の円舞曲（ワルツ）』というバリバリの演歌に合わせて、ひとりでワルツを踊るというものだった。

「ひとりで、ですか？」。私はあきれた。『バカみたいじゃない？』。

「そーそーっ、松井ちゃんは、男に振られて打ちひしがれてる女の人なわけよ。家に帰ると、ひとり身の侘（わび）しさが、辛く悲しく胸を締めつける……。そして別れた彼を思いつつ、ワンツースリー、ワンツースリー、こうっ、軽やかにステップ、ステップ」

細身のディレクターは『自分でやったほうがいいのでは？』と思うぐらい、スマイリー小原を彷彿（ほうふつ）とさせる腰つきで踊った。

「家でひとりで?! 男に振られて踊りますか!?!」

「踊るんですっ」。ディレクターはきっぱりと言った。

『そうか、そんな変な女だから振られるんだな』。私は一応、納得した。

「そしてえっ、歌のサビッ、クライマックスで、こーゆうふうにい、ネグリジェをはためかせて、オーバーにい、ソファに倒れこむっ」

彼はそう言いながら、本当にドンッという音をたててソファにバウンドした。けっこう背中が痛そうだった。

しかし、そんなことはどうでもいいっ。私には彼の言葉の一点が、非常に聞きずてならなかった。

「ネグリジェエエエエエ!?!」。頭の中はぐるぐる回転した。

『いやっ、ネグリジェといってもいろいろある。普通の綿ローンで出来た花模様の乙女チックなやつとか、薄手のジャージィで出来たハウスウエアのようなのとか。そうっ、決してスケスケの、あのっ、ナイロンで出来たフリフリのネグリジェだけが、ネグリジェではないはずだ』

しかし、祈るような私の願いは見事に打ち砕かれた。アシスタントディレクターが出してきたのは、黄色のベビードールという、丈が異常に短い最悪のネグリジェであった。もう一枚、ピンクのロング丈の「これぞネグリジェ」というものも用意されていたが、こちらのほうとてスケスケであることに変わりはない。

私はゾッとした。『逃げ出したい……』。

うろたえる私の様子には目もくれずディレクターは、明るく言った。

「んーっ、この長いほうがいいかなあーっ？ 松井ちゃん、とりあえず、両方着て見せてくれる？ それから、どっちにするか決めよう」

私は二枚のネグリジェを渡されて、重い足どりで奥の部屋へ入って行った。

『どうしよう……』

さんざん悩んだ末に、私は意を決して着替えることにした。

二枚ともいっぺんに着ることにしたのである。いちばん下には最初から着てたスリッパ、その上には黄色のベビードール、そのまた上にはピンクの丈長のネグリジェと、都合三枚着込んだことになる。

『よしっ、これならどこにライトを当てられても、スケる心配はない』

スタッフは体のアチコチが不自然にデコボコしているネグリジェ姿で出て来た私を、いぶかしげに見ていたが、

「これで、いきますっ。すごく寒いんですっ、中にスリッパ着ましたっ！」

という、鬼気せまる迫力に押されたのか（哀れに見えたのか？）、

「わっ、わかりました、じゃ、これでいきましょう」

ということになった。

そのあと、妙に着膨れしたネグリジェ姿でひとりワルツを不気味に踊り（いつまでもリズムがとれないのでディレクターは、トライアングルで一、二、三、とリードする係までさせられていた）、そしてなぜかトランプを口にくわえて上目遣いをしたりして、最後には例のソファに倒れ込み、撮影は終了した。

後日、飲んでる席でふと口を滑らせたせいで、その『女の円舞曲』をかけてみようということになり、私は出来上がったカラオケビデオを初めて見た。

自分で大人っぽく化粧したつもりの顔は狸みたいだったし、ネグリジェはやっぱりボコボコしていて、おまけにひとりで踊るワルツは狂女のそれだった。

友人たちは、お腹をよじらせて大笑いしていた。

だが、ディレクターの狙いがそこにあったはずはなく、案の定その会社の仕事はそれから一本も、私の所には来なかったのである。

新幹線尻丸出し事件

長い人生の中には、誰にでも穴があったら入りたいような、思い出すのも恥ずかしい出来事のひとつやふたつあるものだ（私には、百個ぐらいありそうな気もするが）。

その中のひとつを、恥を忍んでお話ししよう。

それは、アニメビデオのイベントに出演するために、大阪へ行った帰りの新幹線ひかり号の中で起こった。

名古屋を過ぎて、あとは東京までノンストップで二時間弱、『今夜中には、家に着けるなあ』なんてことを考えつつ、さっきからずっと行きそびれていたトイレへ行こうと私は席を立った。

トイレのある連結部の通路の所に来ると、「松井さんっ」と前の方から私を呼ぶ声がした。見ると、若い男の子が立っている。この人なつつこい笑顔には見覚えがあった。

「ああ、たしか、今日イベント会場にいらしてましたよね」

「えっ、覚えててくれたんですかあ、感激だなあ。僕、松井さんのファンなんです。見送りに来て、つい一緒に新幹線に乗ってしまいました」

いやはや危ないことを言う。

「でもあなた、東京へ着いても、もう帰りの列車ないんじゃない？ どうするの？」

私はこの衝動的行動力のある少年の今夜の寝床が、心配になって来たのだ。

「いいんです。学校も春休みだし、東京のおばさんの所に泊めてもらえるように電話しましたから」

彼がにっこり笑って言うので、安心して、

「あっそう、じゃ、気をつけてね（さ、トイレ、トイレ）」と、立ち去ろうとした。

すると、

「サインをいただけないでしょうか？」

と色紙を出してきたのだ。それも三枚も。

私は、『あの～、トイレへ行く途中だったんですけど』と訴えたかったが、グッとこらえて、『わざわざ大阪から追いかけて来てくれたのだから』と自分に言いきかせ、一枚一枚丁寧にサインをした。

なのに彼は、

「あの、僕の名前と、日付と、ここに座右の銘を書いてもらえませんか？」

と言うではないか。名前と日付だって今の私には省きたいところだというのに、

「ザァユウノメイ？」

「トイレ」の三文字しか頭に浮かばなくなっていた私は、そこに「トイレに行かせて！」と書きたかったが、それではあんまりなので必死で笑顔を作り、「ガッツ!!」と記した。

すでに限界にまで達していたのだが、彼が立っているすぐ後ろのトイレには、なんとなく入りにくい気がして、私は二両先のトイレへ小走りで駆け出した。

『よかったあ、空いてる』。ドアを閉めて用をすませ、ホッとしたのもつかの間、私が立ち上がろうとすると、

「ガチャッ」

とドアの開く音が後ろでした。

「ん？」と振り向くと、一瞬、慌てたような男の人影が見えて、ドアがまた「ガチャッ」と音をたてて閉まった。その間、わずかに数秒の出来事だった。

「どっ、どういうこと?!」

身支度を整えてから、気を落ち着かせてよく見ると……。

あのとき慌てていた私は、こともあろうに！ ドアの鍵を掛けずにトイレへ入っていたのだ。そして次に来た男の人が、それと知らずにドアを開けて、あとは……。もう考えるのもいやだった。

とにかく「誰かが後ろから私のお尻を見たっ！」というのは、絶対的に確かなことだった。

私はトイレの中で考えた。

『もし、今の男の人がさっきのファンの男の子だったら?! いやっ、いくらなんでも、それでは運が悪すぎる』『ちょっと待てよ。今、私が出て行って、ドアを開けた男の人が、まだ前に立っていたら? ……そうだっ、あと五分はここにしよう。そうしたらその人も諦（あきら）めて、他の車両のトイレへ行くに違いない』

……………トイレの中で五分が経過した。私の頭には、またさっきとは違う、恐ろしい考えが浮かんできた。

『私の顔は後ろ向きだったから、きっとよく見えてはいないはずだ。それはよしとしても……、この服っ、この服は目に焼き付くほど、派手だ……』

私の服は、イベントの衣装として着ていた、エメラルドグリーンの色鮮やかなスーツだったのだ。

『まずいっ、この色は覚えられているに違いない』

私が乗客の通路を通ったときに、

「あっ、トイレで見たエメラルドグリーンの女だあ！」

とその人が言い出さないと限らない。そして、団体客のひとりで、

「さっき話しただろっ。アイツだよ、アイツ」

なんて指をさされでもしたら……。 「クスックスックスッ」と車内に広がる、笑いのさざ波……。

私の妄想は膨らんでいった。

その間、約三十分。

さすがに私も『いつまでもここにいられるわけじゃない』と観念して、スーツの上着を脱ぎ、髪で顔を隠し、少しでも「別人」に見えるようにして外へ出たのだった。

なるべく目立たないようにコソコソ歩いて自分の座席へ向かうわずかの距離が、私にはやたらと長く感じられた。

しかし想像していたことは何ひとつ起こらず、ホッとして席に座り込むとマネージャーが、のんきに聞いてきた。

「ずいぶん遅かったねえ、もう着いちゃうよお。何かあったの？」

疲れきった私には、

「べつに」

と答える気力が残されているのみだった。



かつて、「思い込み間違い歌シリーズ」というのが、ある雑誌の読者ページでえらく流行ったことがある。

有名なのは、童謡の『赤い靴』の話だ。歌詞に「異人さんに連れられて行っちゃった」というところがあるが、それを「ひい爺さんに連れられて行っちゃった」とか「いい爺さんに連れられて行っちゃった」と、勘違いして覚えてしまった人がけっこう大勢いて、「ひい爺さんやいい爺さんが連れて行ったのなら、そんなに暗くなることもないのに」と、内心思っていたというのだ。その投稿コーナーを読むたびに大笑いしたものである。

私の友人も子供の頃、堺正章さんの『さらば恋人』の冒頭の歌詞「さよならと書いた手紙」というのを「さよなら東海、たてがみ」と、「そりゃ、JRのCMか？」と言いたいようなわけのわからない思い違いをしていたにもかかわらず、何の疑問も持たず歌っていたという。だから未だにこの歌を聞くと「ライオン」の姿が頭に浮かぶらしい。なんとなくわかる気がする。

この間テレビで「懐かしのフォークソング」というようなタイトルの番組を見ていたら、さだまさしさんが歌う『精霊流し』がかかって、その下にグループ名として「レーズン」とテロップが出た。悪意はなかったにしろ「グレープ」を、カサカサにしぼんだ「レーズン」と間違えるなんて、あんまりである。しかし、おかしかった。あははは。

人のことを笑っている場合ではない。最近私も愚かな間違いを指摘されて、赤っ恥をかいてしまった。

それは、歌詞ではなく、漢字の読み間違いだった。

ある共通の知人のお葬式のこと話題に上がったときに、私が暗く沈んだ声で、「残された奥さまは『ゴウナキ』しました」

と言うと周りはずいぶん、キョトンとした顔をしている。中のひとりが、「それを言うなら号泣（ゴウキウ）でしょ」

と笑いながら訂正してくれたのだが、すごいショックを受けてしまった。だって、恥ずかしながら私はこの年まで「号泣」は「ゴウナキ」だと信じて疑わなかったのだから。あ～、穴があったら入りたい。

しかし、わが身をかばうわけではないが、こういった類の思い違いは、毎日のように「台本を読む」という仕事をしている都合上、よく目の当たりにする出来事なのである。

「突如（とつじょ）」というのを「とつきょ」だと今の今まで思っていたとか、「詳細（しょうさい）」を「くんさい」あるいは「ようさい」と読んでいたとか、意外に皆ひとつくらいは愚かな思い違い「漢字」を持っているものである。

「お侍（オサムライ）さ～ん」という台詞を「お侍（オマチ）さ～ん」と読み違えた声優さんもいて、そのときはスタジオにいた全員が爆笑してしまった。

先日もこんなことがあった。

私はスタジオの中で数人の先輩の役者さんと、風邪対策についての雑談をしていた。

「やっぱり、栄養を摂らないといけない」と、いつしか話は「精のつく食べ物」へと移行していった。

誰かが「鰻はいいよね、きも吸いのキモも元気が出るしね」と言ったのを聞いて、私はかねてから感じていたあることを、思いきって口に出してみたくなった。「皆もそうでしょ？ ウフフ」という気持ちを込めて。

「だけど、あれって、食べるときちょっと恥ずかしくないですか？ ねえ」
すると、そこにいた人たち全員から、
「なんで?!」

と一斉に聞き返されてしまったのだ。詰め寄られた私は、
「エッ？ エッ？」

と一抹の不安を感じながらも、
「だって、きも吸いの『キモ』って、鰻のオ○ンチ○じゃないんですかあ？」
またもや、愚かな思い込みを大公開したのであった。
当然スタジオはドツと湧いて、なかには笑いすぎてお腹を押さえ苦しんでいる人もいる。
「えーっ！ 違うんですかあ？ でっ、でも、形もそんなふうだし、うちの母が声をひそめて『精がつくから我慢して食べる』って言うからてっきり。それに、あのう、キモっ玉って言いません？」

私は苦し紛れに余計なことを口ばしっていた。

「それじゃあ、キモっ玉かあさんは、オ○ンチ○のついてるような（下ネタばかりですいません）威勢のいいおっかさんってことかあ？」

先輩はあきれながら突っ込んできた。

そう、だから私は、「キモのすわった」とか「キモに命じて」「キモを潰（つぶ）す」という言葉を、なんて男っぽい表現だろうかと……、いやっ、これ以上、何も言うまい。

「あのねえ、鰻のきもの『キモ』は、肝臓の『カン（肝）』って書くのよ」と、このとき教えられて、私は初めて、きも吸いの「肝」の正体を知ったのである。

「じゃなに、松井ちゃんは鰻の肝臓を毎回、ドキドキしながら食べてたってわけ？」

という問いには、返す言葉もなかったが、

「ハイ、鰻重のきも吸い付きに出会ってから十数年、赤い顔して、手で隠しながら、味わわないように無理やり飲み込んでました……」

と正直に答えると、またまたドツと笑いが起こってしまった。

そしてしばらくの間そのスタジオで、私の名前は「鰻のキモ」になったのだった。悲しすぎるううう。

<後日談>

「私のように、鰻の肝をオ○ンチ○だと思い込んでいる大バカヤローが、絶対に他にもいるはずだ！」と確信した私は、『愚かな仲間』探しを開始した。そしたら、いた！ いた！ ギャハハハハ！ 周りになんと、三人も！ みんな一様に、顔を赤くして「えっ?! ち、違ったの……?!」と、あぜんとしていた。ウッシッシッ。私だけじゃなかった、良かったあ！

しかし、この話を北海道の母に電話で伝えたときに返ってきた発言も「えっ?! ち、違っ

たの……?!」であったのにはさすがに私も驚いたが、この子にしてこの親あり？ だと妙に納得してしまった。



怒りの電車

ここんどこ電車についていない。

ケチのつき始めは、ある朝、「やったあ、セーフ！」と駆け込んだ地下鉄の扉に、ショルダ―バッグの紐がはさまってしまったことだった。

いくら引っ張っても、バックルがしっかりストッパーの役目をして、ストラップが外れない。そうこうしているうちに、電車はそのまま出発してしまった。

アタフタしている私を尻目に若いサラリーマンが、ボソッと呟いたのだ。

「そっちのドア、終点まで開かねえんだよなあ」

いきなり後頭部にガツンとパンチをくらったような衝撃を覚えた。

「そりゃあないよお。わたしゃ次で降りたいのに〜」という嘆きも虚しく、鎖でつながれた犬のように身動きできないまま、電車に乗っているしかなかった。

こっち側の扉が開いたのは、お兄さんの言った通り終点の駅だった。

急いで電車を飛び降りて引き返したのだが、時間のロスは大きく、仕事には大幅に遅刻してしまった。トホホホホ。

次は夕方のラッシュ時、けっこう混んでいたのに運良く座れた私は、立っている大勢の人から垣間見える前の座席のおばさんを、なんということもなくボケ〜っと見ていた。おばさんは口を開けてぐっすり眠りこけている。よくもまあ、公衆の面前でここまで熟睡できるもんだと、その脱力しきった姿に私はなかば尊敬の念を持ち始めていた（いや、実は人のことは、あまり言えなかつたりするのだけどね）。

と、彼女がガクッと舟を漕（こ）いだそのとき、握りしめていた切符が手からヒラッと足元に落ちたのが目に入った。前に立っている人が気がついて拾ってくれるだろう、としばらくは放っておいたのだが、どうもその気配がない。

こういうとき、したんぷりできない性分の私は「しょうがないなあ」と腰をかがめたまま、人をかきわけて切符を拾い、まだ眠り続けているおばさんの手の甲をトントンと軽くたたいて起こそうとした。

彼女はハッと目を覚まし「ここはどこ？ あんた誰？」というような顔をして、私を見ている。

「あのっ、これ、落ちましたよ」

切符を差し出すと、おばさんは面倒くさそうに、

「どうも」

と受け取った。

そして次の瞬間！ このおばはんは信じられない行動をとったのだあ！

なんと、彼女を起こすために私が触った方の手の甲を、汚いものでもぬぐうかのように、ゴシゴシと自分のスカートにこすりつけたではないか！

私は、我が目を疑った。『なっ、なんなの、この人〜っ！』

いやっ、たぶんおばさんは無意識についやってしまったとか（善意に解釈すれば、よ）、異常に潔癖性の人だったとか、ひどく寝起きが悪いタイプだったのかもしれないが、どっちにしたっ

て私はものすごく傷ついてしまった。

「しっ、しどいっ、許せんっ」と憤慨しながら席へ戻ろうとしたら、私の座っていた所には、すでに制服姿の中学生がちゃっかり腰かけていた。

また、ある夜の山手線の車内では、はた迷惑な大酔っぱらい男と遭遇してしまった。

年の頃は四十代後半ってことの、酔ってなければキチンとしたやり手のサラリーマンに見えそうなガタイのいいおっさんだったのだが、とにかくこいつの声がばかデカかった。

ひとりで電車になだれ込んで来て、いきなり車両中に響き渡る声で「だいたい今の総理大臣はだねえ」と政治の話をしだしたかと思うと、いつの間にか「許せんのは、サリングス」。まあこれは同感できるが、「なんだあの、ナタデココってやつはよお」とやたらと守備範囲が広い。これを聞いただけでは「けっこう笑えるキャラクターじゃない」と思う人がいるかもしれないが、実際に遭遇してみるとそんな甘いものではなかった。

このおじさんのいちばんイケナイところは、「他人に話しかける（それもつんざくような大声で）」という点だった。よくいる、無害なモノローグタイプの危ない人ではなかったのだ。

私は三、四人離れた扉の所に立っていたからまだ良かったが、目の前に座っている女の子は、「なっ、なっ、そうだろっ？ えっ？」

と顔を覗き込まれるように話しかけられて、どうしていいのかわからずイヤそうにずっと下を向いたままだった。

吊り革につかまりながら、そのおやじがブンブン体を揺らすので、左右に立っていた男の人たちも怖がって少しずつ間を開け始めていた。

そしてこいつが、

「ギャアアアア！ ハッハッハッハア～！」

という笑いとも奇声ともつかぬ声を発したとき、『もうっ勘弁ならんっ、ちっとは人の迷惑も考えろっ』。私の怒りは最高潮に達した。

「うるさいっ！ 静かにしろっ！」

と怒鳴ってやろうかと思ったが、さすがに怖かったのでそれはやめた。

その代わり精一杯眉間に皺を寄せて、思いっきり「キッ」と、酔っぱらいおやじの背中にガンを飛ばしてやった。まっこれが、私にできるせめてもの抵抗だった。

だがちょうどそのとき、運良くというか悪くというか、おやじがこっちを振り向いた。バチッと目が合ってしまった！

『ゲ～っどうしよう?! 怒らせてしまったかも?』。私は、とたんに怖けづいてオタオタした。案の定おやじは顔を真っ赤にして、

「なんだあ！ テメエ！」

と身を乗り出してきたではないか！

『キャ～、もう絶対絶命、だっ誰か助けてえ!』。心の中で叫びつつ、私はズリッと後退りした

。

ところがこのおやじは大声で、思わぬことを言い放ったのだ。

「なんだあ！ テメエ！ 『宮沢りえ』みたいな顔して睨みやがってえ」

「……………へっ?!」。車内は水を打ったように静かになった。

天と地がひっくり返ったって、『宮沢りえ』に似ているとは思えない私は、振って湧いたようなこのおやじの発言に、クラクラとめまいがした。

「こりゃ、ギャグかよ?」と、恥ずかしさのあまりうつむいていたら、こっちの気もしらず、おやじはフラフラと扉の方へやって来て、次の駅でさっさと降りようとしている。

そして振り返りざまに、

「じゃあなあ! 宮沢あ!」

という捨てゼリフを私に残し、消えていったのであった。

『なんなのよお、いったい!』。私は、おちょくられたような怒りを覚えた。

しかしその一方で、

『まっ、サラリーマンもいろいろと大変なんだろうなあ。たぶんあの人も相当ストレス溜まっちゃってるんじゃないの? ちょうど中間管理職って感じだし』

とおやじをかばう気持も、なぜかフツフツと沸き起こってくるのだった。

目的地へ着いて、電車を降りる頃には、

『それにしても、あたしが宮沢りえだって! だいたい年がいくつ違うと思ってんのよ、あははは。……………。案外イヤツだったかもしれない』

という結論に至っていたのである。女ごころってえのは、わからないもんだよねえ。



所変われば、具も変わる

急に、スキヤキが食べたくなった。

よしっ、早めに仕事が終わったら、スーパーで買い物して、おうちで作って食べよっ。

スタジオのロビーのソファで出番待ちをしていた私は、ほかほかの湯気を出してグツグツいってるスキヤキを思い描いて、ひとりニヤニヤしていた。

エートお、何が入ってるんだっけねえ、スキヤキって。ん〜、まずは、牛肉だろ、しらたき、焼き豆腐に、春菊、それから……ん？

あと何だっけ？ めったに鍋物なんかしない私は、どうしても思い出せない。たまたまそばにいた某プロダクションのマネージャーに助けを求めることにした。

「ねっ、Sくん、スキヤキってどんなものが入ってるんだっけねえ？」

「やだなあ、なにひとりで真剣な顔してんのかと思ったら、晩ご飯の心配してたんですかあ」

「なんだか、無性に食べたくなっちゃたのよねえ」

「エ〜、スキヤキですかあ。スキヤキっていったら、やっぱり、肉ですよ。まっ、普通はマトンか豚肉ってところですかねえ」

「……」。マ、マトン？

「えっ？ マトン、入れませんか？」

彼にひるむ様子はない。

「ちょ、ちょっと、あなた、もしかして出身は……」

「はい、北海道です」

やっぱりだ。羊肉の本場といえば、なんといっても我が故郷、北海道である。

しかし、豚肉はまだしも、マトンのスキヤキなんて、聞いたことも見たこともなかった。少なくとも、うちは違った。

「や〜、僕んちでは、昔っから、マトンだなあ。友達の家で食べたときも、たしかそうだったと思うけど」

「じゃ、初めてお店で食べたとき、変だなあって思わなかった？ あっ牛肉だ、って」

私は素朴な疑問をぶつけてみた。

「べつに。だってほら、家庭料理とよそゆきの外食じゃ、使う材料が全然違うことってあるじゃないですか」

ごもつともである。我が家でも、鳥肉ではなく、なんとなくいつも冷蔵庫の中にあるハムやベーコンで、ケッチャップと炒めたケッチャップごはんが「チキンライス」と当たり前のように呼ばれているし、シーフードサラダも、蟹缶よりもっぱら安くて手軽なカニカマボコが活用されている。洒落（しゃれ）たレストランでは許せないことも、家で食べるぶんにはいっこうに差し支えなく、それどころかかえってその味のほうが好きだったりする。

そう、家は家、外は外なのだ。

「ねっ、あとは？ あとはスキヤキに、どんなもの入れるの？」

もしかしたら、マトン以上にとんでもないものが出てくるのではないかと、私は興味津々だった。

「そんな、普通ですよ。春菊とかあ、玉ネギとかあ」

「ふーん、なーんだ、野菜類は普通なんだ」

私がつまんなそうに言うと、向かい側に座っていた女の先輩（ちなみに三代続いた江戸っ子）が、

「ちょっと待ってよ」と、話に割り込んできた。

「黙って聞いてたんだけど、あんたたち、普通スキヤキに、玉ネギは入れないでしょう！ 昔から、長ネギに決まってるのっ」

いきなり喧嘩腰である。

「ええ、長ネギも入れますけど、玉ネギも入れるでしょ、ねえ？」

私は隣のSくんに同意を求めた。

「はい、うちは玉ネギだけですけど」

マトンでは、袂（たもと）を分かったふたりであったが、広大な玉ネギ畑を見ながら育った北海道ペアは、ここへ来ていっきに結束した。

カレーに必要不可欠のように、私にとってスキヤキの中のそれはけっこう重要なポジションをしめていたのだ。

「そんな、玉ネギを入れたスキヤキなんて邪道よ！」

先輩は怒り出した。

私たちは、「だ、だって、入れるんだもん」とオロオロするばかりである。

そこへ、新人の女の子が、横から、

「あの～、モヤシも入れますよねえ、普通」

と探るような目で言い出したではないか。

私が「えええ～?!」と動揺していたら、今度はうちのマネージャーが、

「白菜を忘れちゃ困りますよ」

と自信満々の発言である。

それから先は、「いや、うちは、きのこ類や豆腐は入れません」という人がいるかと思えば、「えのき茸もシメジも入れる」「たけのこは、絶対入れてほしい」と言う人もいたり、「そんなのは、聞いたこともない」と突っぱねる人もいれば、「あっ、それ今度入れてみよう」と言う人もいて、いつの間にかスタジオのロビーは、スキヤキの具の話題でもちきりである。

しかし、話はそこで留（とど）まらず、具を食べ終わったあとの「第二ラウンド」の論争へと移っていった。

「煮詰まった割り下に、からめて食べるうどんがたのしみでねえ」

「オレは、餅のほうがいいなあ」

私は、年配の役者さんふたりの会話を聞きながら、

『我が家は、最後は何にも入れないで、次の日、残った具の上に卵をのっけて、スキヤキ丼にして食べてたっけなあ』

と思い出して、生唾をゴックンと飲み込んだ。

すると、今まで静かに台本のチェックをしていた男の子が、すくっと顔を上げ、

「えっ、それは、大根のほうがいいですよ」と、きっぱり言ってきたのだ。

「うちは、いちばん最後に、大根を入れるんです。翌日は、味が染みて、それはうまいんです」
なるほど、美味しそうである。さらに彼は続けた。

「あれっ？ 普通、ほとんどの家では、そうしませんか？」

これ、これ、これよ。みんな、自分ちの「スキヤキ」を「ごく普通の」と、はなっから決めつけているのだ。

「大根ねえ……………」。あまりの突飛な具の出現に、私たちは何も言い返せなくなった。

いや、もちろん、スキヤキに大根を入れてもいいし、モヤシを入れてもいいし、その家のオリジナリティや地方色が出てても、それが家庭料理っていうもんで、まったく構わないことだと思う。だいたい、何が正統派か、なんてなかなか言えるものじゃないしね。

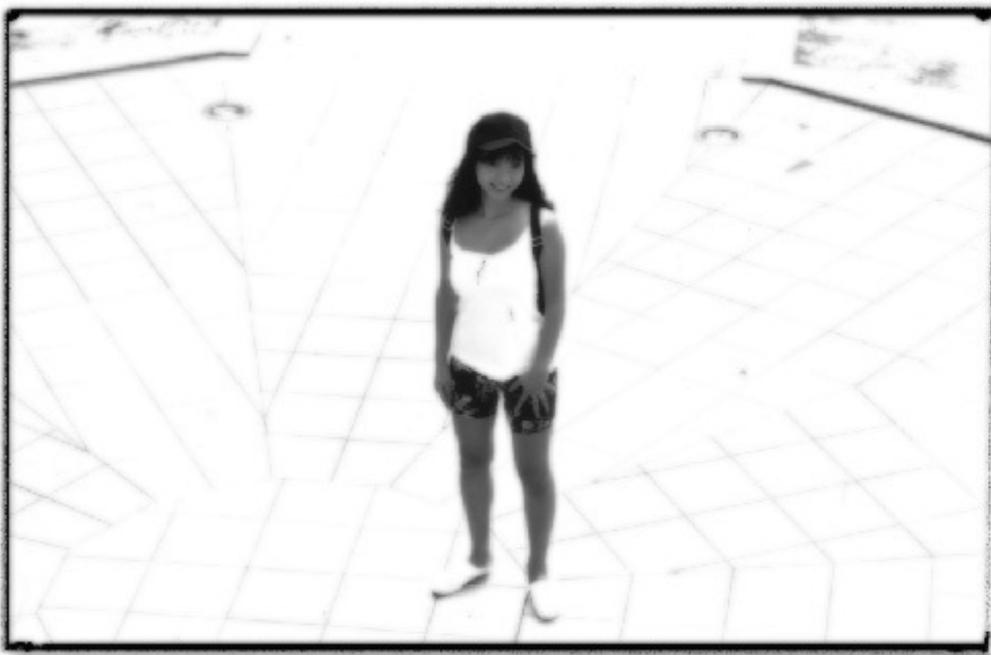
でも、こうまでみんなが「我が家こそが一般的」と思い込んでいることに、私は驚いてしまった。そういう自分も、長年食べ続けてきた「玉ネギ入りスキヤキ」が「当たり前」だと、確信していたひとりなのだが。

スキヤキでこれだけの珍説が出てくるのだから、こうなると他の料理も調べてみたくなる。

料理だけではない。もしかしたら、家庭という一種の密室で、その家族だけが「普通」だと思っている、ものすごく「変なこと」が実は、行われている可能性だってある。

よそちを覗いて「それ、オッカシ〜」ってなものを発見して、ガハハと笑い飛ばすのも、けっこう楽しいかもしれない。

意外に自分ちが、いちばん変わってたりして……。ゲッ。



「カンユ」というものをご存知だろうか？

先日、二十代前半の男の人に聞いたら、

「知らない」とあっさり言われて驚いた。

「えっ?! 幼稚園で毎日食べなかった？ カワイのカンユ」

「いいえ、ぜんぜん。それって、どんな食べ物なんすか？」

反対に聞き返されてしまった。いつ頃から幼稚園では、子供に「カンユ」を与えなくなってしまったのか？ なんだか私は、「カンユドロップ」を知らずに育ったその若者が、とても気の毒になって、どうにか感じをつかんでもらおうと、やけに、ムキになって説明した。

「あのね、きれいな濃いピンク色をしたゼリーでね、ちょっと弾力があるんだけど、グミってほどじゃないのよ。大きさはマーブルチョコぐらいで、外側に白い粉砂糖がまぶしてあるの。周りが固くて、噛むとグニュッと柔らかいあの感触がよかったのねえ。歯にくっついたりもしたけど。とにかく、甘くて、ほっぺたが落ちそうなくらい美味しかったのよ、これが」

うっとりして語っていると、その彼は食べてみたいと思ったらしい。

「へーっ、じゃ一度買ってみようかなあ、それってどこで買えるんすか？」

「えっ？ ど、どこって……」。私は答えに詰まってしまった。そんな！ カンユを買うなんて大それたこと、考えたこともなかった！

あれは、幼稚園の先生が毎日一個（ごくたまに二個）くださる貴重な品で、そんじょそこいらでは売っていないもんだと、五歳の頃からずーっと思っていた、愚かな自分に気がついたのである。

「大人の人が（もう気持ちは幼稚園児）、鳥目に効くって言ってたから、たぶん薬局にあるんじゃないの。だって、スーパーやお菓子屋さんで見たことないもん」

そうだ！ だから、あれは特別なルートでなければ手に入らないのだと、子供心に思い込んでいたに違いない。

「じゃあ、ビタミン剤みたいなもんか」

若者は言った。

『ああ、私の神聖なるカンユドロップにそんな言い方するなんて……』

そして先日、タイミングよく私の所へ六十粒入りのカンユが一缶、送られて来たのだ。それは、芸能人健康保険組合（っていうのがあるんです）が黒字還元で会員にプレゼントしてくれた「健康食品セット」（ビタミンC剤とかクロレラとか）の中のひとつとして入っていた。

まさに、憧れの「カワイのカンユドロップ」である。缶の裏には、「成人は一日三粒」と書いてあったが、一度でいいから口いっぱい頬ばってみたかった私は思いきって十粒ぐらいを手のひらに載せてみたのだが、どうしてもいっぺんにパクッと食べることができない。

「カンユを一度に食べると鼻血を出す」と言っていた子がいたのを思い出したのだ。私はちびちびと一個を時間をかけて味わうことにした。

広がる甘い香りとともにカンユにまつわる懐かしい話も、昨日のこのように蘇って来たのである……………。

毎日午前十時頃に決まってそれは、幼稚園の先生の手から蔽（おごそ）かにひとりひとりに配給されることになっていた。たった一個しかもらえなかったから、いとおしそうに周りの粉砂糖だけをまず舐（な）める。手がベタベタになりながら、しゃぶっていても、あっという間にお腹へ入ってしまった。当時、園児の誰もが『いつかカンユをムシャムシャと、お腹いっぱい食べてやる！』という大なる野望を抱いていたに違いない。

その日の午後、皆はもう帰り始めているというのに、私はトイレへ行きたくなって、ひとり出遅れてしまった。

「もう誰も残ってないだろうなあ」と思いながらカバンを取りに教室へ戻ってみると、A子ちゃんがぼつんと上を見上げて立っていた。

彼女の目線の先をたどってみると、果たしてそこには棚のいちばん上に置かれた、カンユの大きな缶があった。

『こんなに近くに、こんなに無造作に、大事なカンユが置いてあったなんて』

私は驚いた。『なんで今まで、気がつかなかったんだろ？』。

A子ちゃんはポカンとした顔で、ずーっとカンユの缶を見ている。

「ねっ、もしかして、アレ、食べたいの？」

と私が聞くと「うん」とA子ちゃんは頷いて、すがるような目で、こっちを向いたのだった。その眼差しは、「なおちゃん、お願いっ、きっとあなたならできる！」と訴えかけているようだった。

「なあーんだ、それなら私が取ってあげる」

ええかっこしいの私は、つい胸を張って、言ってしまったのだ。

そして棚の前へ椅子を置き上へのって、思いっきり背のびをしてカンユの缶へと手を伸ばした。しかし、もうちょっとのところで届かない。

「がんばってえ！」A子ちゃんは下から応援してくれている。

「う～んっ、う～んっ、それっ」と、何回か飛んだり跳ねたりした甲斐あって、指先が缶に当たったそのとき、ガラッと扉が開いて、担任のすみれ組みの先生が入ってきたのだ。

「ゲッ、まずいっ」と、私はとっさに伸ばしていた手を引っ込めた。でも、椅子の上でアタフタしている姿は、どうみてもウサンくさかった。

観念してガックリとうなだれていると、髪を後ろでひとつに束ねたトワ・エ・モア（懐かし～）の白鳥英美子さん似の先生は、意外なことに、

「あらっ、まだお教室に残っていたのね」

といたって優しい口調で、話しかけて来たのだ。そして、こうのたまわれた。

「じゃ、なおちゃんとA子ちゃんには特別に、カンユでもあげましょうかねえ」

その唐突な発言にアッケにとられながらも、私たちふたりは無邪気に喜んで、トワ・エ・モア先生からそれぞれ二個ずつカンユをご馳走になったのだった。

「なんかわかんないけど、ラッキー！」というのが当時の私の感想であったが、今考えると相当図々しい。

それに引きかえ、怒られて親に連絡されてもしょうがないことをした私に、神様のごとき温か

い手を差し伸べてくれた、あのトワ・エ・モア先生はなんと偉大な人であろうか！ あれから一度の万引きも経験せず（威張ってどうする！）グレることなく生きて来られたのは、彼女のあときの優しさのおかげのような気がしてならない。

今頃先生はどうしているのだろう。きっと、とても良いおかあさんになっているんだろうな。



ハワイ親孝行旅行

「そうだ、たまには親孝行でもするか」

と思立ったのは、一昨年春のことだった。

北海道から東京へ出て来て早十数年。親と離れての暮らしも、それだけ経ったということになる。

「昨日うちの母親とデパートへ行ったんだけどねえ……」

自宅から通っている子がこんな話をするたびに、けっこう羨ましがっている自分がいた。

母が上京して来たときになぜかいつも仕事が立て込んでいる私は、開拓しておいた好物のそば屋へもいつまでも連れて行けなかった。様子を見に慌しくやって来て、また慌てて父の元へ帰っていく母とここしばらく仕事にかまけて、落ち着いて話もしていなかったことに気づいたのだ。

「よしっ、旅行にでも連れてってやるかあ」

私は母娘水入らずの旅行を計画することにした。

しかしこの思いつきを後悔する日がほどなくやって来ようとは、このときの私にはまだ知る由もなかった。

「どこへ行きたいの？」と電話すると、即座に母は、

「ハワイがいい」と答えた。

仕事の都合上、五日しか休みが取れなかったので、

「ハワイは日付変更線を超えるから、実質三泊ってことになっちゃうの。グアムかサイパンにしたら？ それにおかあさんは海外旅行初めてだから、飛行機の中の七時間ってこたえと思うよ」といくら言っても、

「いやっ、絶対ハワイがいいっ」と聞かない。

なぜ彼女はそれほどまで「ハワイ」にこだわったのか？

そのわけはハワイ親孝行旅行の一日目のディナーショーのときに、明らかになったのだった。「ダニー・カレイキニショー」は、私たちの宿泊先から車で十五分ほど行った「カハラヒルトンホテル」で毎夜開かれている、フラダンスのコーナーもある観光客向けのものだった。

ハワイの「杉良太郎」と呼ばれているダニーさんの歌うハワイアンソングと巧みな話術を、母も十分満足してくれるだろうと、これを前に一度見たことのあった私は確信していた。

さて、ステーキのフルコースをふたりともきれいにたいらげ、

「このあとフラダンスがあつてね、それからいよいよ、ダニーさんの歌だよお」

と私はわくわくして言った。すると母は、

「ちょっとトイレ」

と席から立ち上がったのだ。

「ひとりでわかる？ 大丈夫？」

私は心配して声をかけた。

「大丈夫よ。ここは日本語が通じるんだから」

母はやけに強気で、レストランを出て行ったのである。

そしてそのまま、三十分以上帰って来なかったのだ。

レストランの照明は落とされ、客席はほとんど真っ暗になり、とっくにフラダンスは始まっている。

知り合いの旅行代理店の人が気をきかせて、私たちをいちばん前のテーブルに着かせてくれていた。だから、ぽっかり空いた母の席は舞台の明かりに照らされて、やたらと目立ってしょうがなかった。

「真っ暗で自分のテーブルがわからなくなったんじゃないだろうか？」

周りに目をこらしたが母の姿はなかった。

ドンドコドンドコドンドコというフラの太鼓のリズムに合わせて、私の心臓の鼓動も速くなってきた。

「遅すぎる……」。フラダンスを楽しむどころではない。

『まさかとは思うけど、トイレで何かあったのでは……？』『どこから見ても間違いなく典型的日本のおばさんである母は、トイレで日本人＝金持ちと思っているギャングかなんかに、誘拐されたってこともありうる！』。物騒なことばかり浮かんで来て、私はいてもたってもいられなくなった。

するとその様子を見て、胸の内を察してくれた日本人系のボーイさんがそっと「おかあさんがトイレから帰って来ないのか？」と、英語で耳打ちしてきた。

「イエース、イエース。」なんとなく意味がわかった私が答えると、彼は「自分が行って来る」と胸に親指を立てるゼスチャーをして、にっこり微笑んだ。そして「Don't worry!」と言うとすぐ、母を捜しに行ってくれたのだ。

「異国の地 触れる情けに フラダンス」と一句が浮かんできそうなほど、彼の親切がありがたかった。

だってここで私まで席を立ててしまったら、すでに真ん前で歌い始めているダニーさんに「つままないから帰る！」と言ってるようなものだ。同じ舞台に立つ者としてそのショックが身に染みてわかってる私には、とてもそんなことはできなかった。それに、なんてことなく母が帰って来た場合、このショーのために払った二〇〇ドルがもったいなさすぎるっ！ と、この場を離れることに躊躇（ちゅうちょ）していた（私ってケチ？）。

しばらくすると、さっきの親切なボーイさんが帰って来て、私に向かって悲しそうに首を振った。そしてもうひとりのボーイさんと一緒に、またレストランから消えて行ったのだ。

「げーっ、いよいよヤバイッ！」

ダニーさんには悪いが、歌なんてもうどうでも良かった。私はあからさまに後ろを向き、薄暗い店内に母の姿を捜した。

「よしっ、ショーは諦（あきら）めた。私もここを出て捜そう」

と膝のナプキンをテーブルへ置いたときだ。ふたりのボーイさんにエスコートされて、母が入口からひょっこり現れたのだ。

かなり注目をあびたにもかかわらず、平然と客席についた母に、ボーイさんが身をかがめて「お嬢ちゃん、泣いてた、シクシク」と手振りを交えて冗談っぽく言ってくれた。

しかし母は、少しも動じることなく、

「あらヤダ、アンタ心配してたの？」

とぬかしたではないか！ 怒りで爆発しそうだった。あんなに母の身を案じてやきもきしていた私に向かって、「アンタ、心配してたの？」はないでしょーっ!!

「今まで何してたのよっ！」

ショーの最中であることを多少は気にしつつ、小さくしかし語気は荒く問いつめた。

「えーっ、ちょっとホテルの庭を散歩してた」

母は悪びれずに言う。

「さっ、さんぼしてたあああ?!」

その声はレストランに響き渡り、私は舞台の上のダニーさんから「キッ」と睨まれるハメになったのだ。

「話はあとっ」と母は言うと、テーブルのワインをグイッと飲み干し、舞台に向かってにっこりしたのだ。

ショーが終わって、泊まっているコンドミニアムへ向かうリムジンの中で私たちはひと言も口をきかなかった。

母のために、移動はすべて高級リムジン、ハワイでいちばん良いコンドミニアムのそれも三十二階の海も山も見えるスイートルームをキープして、ふたりだけのプライベートツアーという贅沢な旅行に私は大枚はたいたのに、

「初日からこの仕打ちはないでしょーっ!!」

私の怒りは、部屋へ着いてからも収まらなかった。

「ねっ、なんで?! なんでショーの最中に散歩してるわけ？ タダじゃないのよあれは!! ねっ、そこんところわかってんの?!」。もうヒステリー状態である。

「だってえ、ワインに酔っちゃってえ、少し酔いをさまそうと思って、夜風に当たりに庭へ出たら迷っちゃってねえ、どうしよう？ って思ってたらボーイさんが捜しに来てくれたのよ。ねっ、菜桜ちゃん、ハワイの人って親切よねえ、ホント」

母には反省の色がまったくない。

「あのねえっ、あの真ん前の席で、私がどういう気持で座ってたと思う？ ダニーさんだって、あのあと私たちが陰悪だから、イヤそうにこっち見なくなっちゃったじゃないのよっ！ あれは相当怒ってたと思うわよっ。だいたい、このショーは、ハワイの『杉良』だっていうからお母さんも喜ぶかなって、わざわざ予約したんじゃないのよっ」

そう、母は杉良太郎さんの大ファンでファンクラブにも入っているくらいなのだ。

ある日、函館の実家へ帰ったら、「やあ、おかえり」と胸にSR (Sugi・Ryotaro) と刺繍 (ししゅう) がしてあるジャンパー (ファンクラブの通販で買ったらしい) をそうとは知らずに着ている父に出迎えられ、オルゴールを開ければ『すきま風』が鳴り出し、やれやれと寝る時には桜吹雪の杉良サイン入りの毛布を掛けられるという、杉良太郎さん一色の我が家に驚いたことがある。

「それが余計なことだっていうのっ」。母はそう言うと、そっぽを向いた。

『余計のことって何??』。母に詰問した。

「ハワイの杉良なんて、そんなニセ者ぜんぜん見たくなかったのよっ、最初っから」

『えっ？ 熱狂的ファンとはそういうものなの?!』

複雑な中年女性の心理に納得しかけたが、いやいやそれで許すわけにはいかない。

「じゃ、なんで初めからイヤだって言わないのよっ」

私はショーの代金二〇〇ドルがますます惜しくなってきた。すると母は子供のように呟いたではないか。

「カハラヒルトンには行ってみたかった。杉さんのハワイの家がカハラ地区にあるっていうから」

開いた口がふさがらなかった。

つまり、こういうことらしい。

「ハワイに来たいと言ったのも、そこに杉さんの家があるからで、彼が家族をそこに住ませるほど気に入っている場所を、一度自分もこの目で見てみたかった」と。

で、

「もしかしてカハラヒルトンの庭に出れば、それらしい家でも見つかるのでは？」

と考えたというのだから、あきれろ。

「あのさあ、カハラって広いんだからさあ」

私がホノルルの地図を出して来て言うと、

「ううんっ、ほんとは家に行きたいわけじゃないの、それは家族の人の迷惑になるから」

と目を潤ませた。これではまるで、恋する乙女である。

母はただ、「ハワイに着いてカハラに来た。杉さまの家に近づいた」というだけで、十分満足したらしい。こうなるともう、これ以上「なにをかいわんや」である。

私はグツタリ疲れて、倒れるようにベッドへ横になった。

「ああーっ、菜桜ちゃん、お風呂場の窓の景色もきれいよおーっ！」

遠くの方からする母のはしゃいだ声を聞きながら、残された日程の間に間違いなく起こるであろう珍事を憂慮しつつ、私は深い眠りへ落ちて言ったのだった。

ハワイ親孝行旅行＜日記編＞

○月△日 快晴

さて、ハワイ二日目。

母に叩き起こされてハナウマ湾へ泳ぎに行く。

突然だが、私の母ははっきり言って、太っている。記憶では、私が幼少の頃から現在に至るまでずーっと、太っていた。家族皆が残したご飯をかたづけようと食べていたら、こうなってしまったと人のせいにするが、たぶん水を飲んでも太るタイプだと思う。

その母が、水着になった。それは紺色のごく普通のワンピースだったが、なんと、胸に「ELLE (エル)」というブランド名がプリントされている。まるでLサイズを誇示しているようで笑えたが、見ると海辺では母など問題にならない巨漢のアメリカの御婦人方が、太股をユッサユッサ揺らせて歩いているのだ。その光景に自信をつけたのか、母は上機嫌で砂浜で体を焼いたり、シュノーケリングに興じたりしていた。

ハナウマ湾の水はとてもきれいで、色とりどりの魚がいる。楽しそうにパン屑をやっている母を見て、

「ああやっぱり連れてきて良かった。昨日のことは帳消しにしてもいいかなあ」

と思っていた矢先、ちょっと目を離した隙にまた彼女はいなくなったのだ。

「いいかげんにしてよねー」と浜辺を捜していたら、今回はすんなり日本人の観光客の女の子二人と話しをしているところを発見した。

母は私の顔を見るなり、とんでもないことを言い出した。

「あっいいいところに来た、ねっあんたの今やってるアニメなんだっけ？ ちょっとやってみせてあげて」

母よ、ハワイまで来て仕事をさせる気か？

そしてその女の子達に、

「後でいらっしやい、お茶をご馳走するわ」

と自分の部屋へ招待したのである。うちの親ってなんてアメリカナイズしてるの？！

その日の午後、人の良さそうな二人の女の子はやって来た。

「あらっ！ あなた達の部屋は、ベツルームだけなの？」と得意気に聞いていたところを見ると、母はこの32Fのスイートルームを誰かに見せたくてしょうがなかったのだろうと、私はみた。こういう子供じみたところが、母の可愛いところなのだ。娘の私は分かっているつもりだが、果たして他人はそう感じてくれるかどうか。

「・・・それでこの子が、この旅行に連れてきてくれたって訳なの」

母は孝行娘の自慢話をしている。実際ハワイへ来てからというもの、親子の立場が逆転したように、はしゃぎ出した母のお守り役をつとめていたから、

「そうっ、わたし、親孝行なんです」

と言いたかったが、そういうわけにもいかない。その上、こんな話が彼女達にとって面白いとはとても思えなかった。

どういうリアクションをしていいか分からず、しまいには冷汗が出てきた。仕様がなくてコーヒーを入れたり、お菓子を出したりして私はけっこう女の子達に気を使ったつもりだ。「ごめんねえ」の気持ちを込めて。

「じゃっ、ハナウマ湾で撮った写真送るわねえー」

母が気の毒な二人の女の子を送り出してから、なんだかやけに疲れてしまった。

夜になって、夕食をとろうとエレベーターで下へ向かっていると途中の階でアメリカ人の夫婦が「ハイ」と乗ってきた。「ハイ」と応えて、ふと隣りを見ると母は彼らと目を合わせないように、しっかりうしろを向き「あたしには話しかけないで」と体を硬直させている。私は吹き出しかけた。

外へ出ると、寿司屋の看板が目に入った。私は急にサッパリ系の日本食が恋しくなってしまった。

「機内食からずっと、ステーキばかりだったから今日はここで食べよう」

しかし母は、口をへの字に曲げて言ったのだ。

「わざわざハワイまで来てお寿司なんて食べたくない。ステーキとロブスターがいい」
信じられない。まったく胃までタフである。

そしてモアナサーフライダーのレストランで、要望通りステーキを食べ終わると今度は、
「ここのパン美味しいから、残した分包んでもらおう」
と申しだしたのだ。

「こんな高級レストランで、それはないんじゃないの？」

私が止めると、自分でさっさとウェイターを呼んで身振り手振りをお願いしだした。

彼は、にっこり笑って、パンを倍の量にして持たせてくれた。

「菜桜ちゃん、ハワイの人ってホントに親切ねえ〜」

ああっこれでまたひとつ、母の武勇伝が増えてしまった。誰か彼女を止めてっー！

○月◇日 晴れときどきスコール

三日目は、免税店やブティックでショッピング。

カラカウア通りを歩く母は、そこがまるで熱海や箱根の温泉街であるかのごとき無防備さで、突然、

「あっ、菜桜ちゃんこのお店変わってるうー」

と指をさして立ち止まり、人とぶつかったり（謝るのはいつも私）バックのチャックを開けっ放しにしたまま人込みの中へ入って行く。

「お母さん、ここは日本じゃないんだから、お願いだからもっと緊張してっ」

と何度頼んだことか。しかし彼女は

「ハイハイ」

と言いながら相変わらずマイペースだった。

母はどんなショップでも、店員に分かろうが分かるまいが日本語で話しかけ、相手が何か英語で言ってきても聞いちゃあいなかった。そのくせ最後には「ディスカウント！」のひと言で大まけさせた戦利品を抱え、店を後にするのだ。あっぱれである。

夕食時に母がまた「ステーキ！」と言いだすんじゃないかとヒヤヒヤしていた私は、無理やりスパゲティ屋に連れて入った。

「お母さん、ざるそばじゃないんだからズルズル音させないでっ。ほらっ、皆見てるじゃないっ」

と食べ方を注意したら、たび重なる小言に頭にきたのか、

「も〜っ、あんたと一緒だと、緊張して食べた気がしないっ」

母はプンプン怒りだした。

「どこが緊張してんだよおー」と、私は思ったがもう言い返して喧嘩するのも面倒だった。

○月☆日 晴れ ハワイ最終日

やっと帰国できる。

帰りの飛行機の中で、隣合わせた台湾の男の人と友達になり、片言の英語で会話をしていたら、彼はハワイのカハラ地区に別荘を持っていて、成田でトランジットして台湾へ帰省するのだという。

それを知った母は、

「菜桜ちゃんっ、杉さんの家のことを聞いてっ」

と興奮している。「カハラ」の人は皆、杉良太郎を知っていると思っているのだ。

その人の答えは「I don't know」。母は、あからさまにがっかりしていた。

私が隣の人とそのあともずっと話しているのでつまらなくなった母は、スチュワーデスさんから借りた日本の女性週刊誌をパラパラとめくっていた。

と、自分も私達の会話に、無理やりにでも参加したくなかったのか（まったくなんでそういう発想になるのか、今でも私には理解出来ないのだが）、突然、その雑誌の料理のページにたまたま載っていたサバ（魚の鯖である）を指さし、

「ねっ、菜桜ちゃん、ハワイでも『サバ』を食べるのか聞いて」

と言うのだ。サバは確かに母の好物である。しかしなんで今、サバなのか？私は、母のあまりに不可解な発言に動揺したが、一応、サバは英語で何と言うのか考えた。

「魚ヘンに青だから、ブルーフィッシュか？」などと思いつつ、「サバ、サバ、サバねえ」と口ごもるばかりであった。隣の人にはフランス語だと思ったかしらん。

すぐに夕食の時間になって、スチュワーデスさんが「フィッシュorミート？」と、聞いてきた

。

驚いたことに、母はなんの迷いもなく、
「ステーキ、プリーズ！」
とにっこり答えたのだった。

松井智恵子・65歳、ウォークマンで杉良の歌を聞きつつ、一睡もせずに成田へ到着した。分けて貰いたいほど元気である。

引越し貧乏とは、まさしく私のことである。なにせ、二年以上同じ所に住んだためしがない。数えてみれば、上京してから、通算十回もお引っ越しをしていることになる。私が飽きっぽいせいもあるのだが、それだけじゃなく、やむにやまれぬ事情で引っ越しをせざるをえないケースもいくつかあったのだ。

そして最短在住記録には、「たったの一ヶ月半」という輝かしくも、もったいない記録も残している。

七回目の引っ越し先であったそこは、世田谷の二階建てアパートの二階の一室だった、はずであった。「はずであった」というところに、このアパートで最短在住記録作ってしまった理由があった。

引っ越したときから、『このアパートはどこか怪しい』と私は思っていた。

ひとつめの謎は、「ドアの数」である。二階は、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四と四部屋しかないはずなのに、よく数えてみるとドアが、五つあるのだ。キャー!!怖いっ。おまけに、そのひとつ余計な「座敷わらしドア」は、私の部屋のドアの隣にあったのである！

そして夜ごと隣の座敷わらしドアの辺りから鳴り響く「コツツ、コツツ」と階段を上がるような音。部屋の天井をポルターガイストのごとく震わせる激しい地響きと音楽。

「こ、ここは、お化け屋敷だったんだあ〜」

あまりに鮮明な怪奇現象に、眠れない日々が続いた。不眠症になりそうになって、一階の大家に相談に行くと……。

なんのことはない。その座敷わらしドアの奥は三階への階段になっていて、私の部屋の真上にあるpenthouseには、ダンサーをやっている大家のひとり娘がすんでいるのだという。あの地響きと音楽は、その娘がダンスの稽古をしているときのものだった。

「……えっ？ penthouseう?!」。まさに「そんなの聞いてないよ〜」である。私は、二階建ての二階、つまり最上階ってことで入居して来たんだから。

このpenthouseは、下からちょっと見上げたぐらいじゃわからないようにうまく隠して作ってあって、五十メートルぐらい離れて背伸びしてやっと屋根が見えるという、忍者屋敷のような代物だった。

「本当はここ、建築法で三階建てってダメなのよねっ。そこをなんとかって、大工さんに無理言って、ねえ大変だったのよお、わかるでしょ？」

大家のおばさんは甘えた声で言ったが、そんなこと私には関係ないっ。

「三階があるなんて契約と違うし、とにかく、夜中のダンス稽古はやめてください！」

ときつくお願いしてその日は帰ったのだが、事はそれで終わらなかった。

数日後、私の部屋の真下に住むその大家からの「夜中に風呂場で歌うのは、やめてください。近所迷惑です」という手紙が郵便受けに入っていたのだ。

それからまた何日かして「勉強している学生さんが迷惑しています」という一通目の続きのような手紙が来た。

ここでちょっといいわけをさせてもらえば、たしかに昼間は私も大きな声で歌うことがあったかもしれないが、夜中に口ずさんだ覚えがあるのは鼻歌ぐらいの可愛いもので、決して勉強にいそしむ学生さんを邪魔するほどではなかったはずである。

たぶん大家は、「うちの娘をとやかく言う前に、あんただってけっこううるさいのよっ」てなことを言いたかったんだと思う。

下には口やかましい大家、そして上にはドンドコ騒々しい大家の娘にサンドされた私は、間借人の弱さをつくづく感じてしまった。

おまけに、三階のダンスは恋人のダンサーも加わって、前にも増して一層激しくなっていたので、「ここも安住の地ではなかった」と早々と悟り、私は一ヵ月半で撤退することにしたのである。

しかし養成所の頃、ここ以上に上の階の騒音に悩まされた部屋があった。

それは三番目の我が家であった、練馬区のアパートの一階に住んでいたときのことである。

入居して一年ぐらいで、二階に若い夫婦者が引っ越してきた。一見感じの良いカップルだったこのふたりの、深夜の喧嘩がそれはそれはもの凄かった。

ある夜のこと、私が「さて寝ようかな」と布団に入ると二階から突然、悲鳴が聞こえた。

「ギャー助けてえ！ 殺されるうー！ イヤアアアア！」

女の叫び声とともに、ドーンッ、ズズズーッと、人が倒れて引きずられているような音がした。続いて、

「この野郎！ ふざけんじゃねえっ!!」

と男の怒鳴り声がある。ガッシャーンとガラスが割れた音が響いたかと思うと、

「堪忍してっ、堪忍してっ」

女が泣きながらわめいている。安普請のアパートでは一階と二階の天井という仕切りはあってもないに等しく、ちょっと大きな声を出せばほとんど筒抜け状態であった。

私の頭の中には、「髪を引きずり回されて泣き叫んでいる血だらけの女を、鬼のような形相で殴り続ける男の図」が生々しく出来上がっていた。

こっ、これはえらいことだ。警察に電話を！ と、私は受話器に手を伸ばした。

すると上の声が急にピタッと、静かになったのだ。あんな大騒ぎのあとだけに、あまりにシーンとなるのも不気味なものである。私は椅子の上へのり、背伸びをして耳を澄ませた。

しばらくすると微かに、

「う～んっ、う～んっ」

と女の苦しんでいる声が聞こえてくるではないか！

これはいよいよいけないっ、警察っ警察っ！ と、ダイヤルを回しかけたら今度は、

「キャッキャッキャッ」

と女の笑い声がある。そしてまた「う～んっ、う～んっ」と、息も絶え絶えのかすれ声。

「……………」

うら若き乙女の私にも、次第に様子がわかってきた。二階の奥さんは、本当に苦しくてその声

を出しているのではないと……。

夫婦喧嘩は犬も喰わない、今鳴いた鳥がもう笑った、嫌い嫌いも好きのうち、男と女の間には暗くて深い河がある？ という人騒がせな事件であった。

「しかし、男と女ってやつはわからない」と、そのとき私はつくづく思ったものである。

そんなはた迷惑な喧嘩が何回も続いて（飽きもせず毎回同じパターンであった）、「ああ、ここも安住の地ではなかった」と、私は四回目のお引っ越しを決意したのであった。

私が三回目と七回目のお引っ越しから学んだこと

一つ、外観や広さにこだわるより、防音構造は買ってでも欲しい宝であると知るべし。

<特に、私のように声出して稽古をしなければならない仕事の人、ミュージシャン、落語家、浪曲師、バナナの叩（たた）き売りの人などにとっては必須条件と言えるでしょう。そして大騒ぎするのが大好きな友人がたくさんいる人も。また電車や車の音といった騒音には意外にすぐ慣れるものですが、隣や上の人の生活音はいつまでも気になったりします。だから私は、選べるものなら「最上階・角部屋」をおすすめします>

二つ、大家の上には住むべからず。

<騒音のことだけじゃなく、たとえば「下の階に水漏れしちゃった！」という場合にも、大家が相手だとそれじゃなくても分が悪いのに、なお一層住みづらくなってしまいます。大家が下にいるから「心強い」と、大家が近くにいないから「気が楽」を比べたら断然、「気が楽」のほうに軍配を挙げたい>

「女のひとり暮らしに一階は勧めないよ！」

と不動産屋さんに言われたが、私はこの庭付きアパートの一階の部屋がとても気に入ってしまっていた。

庭といってもほんのちっぽけなものだ。それでもステンレスの格子の門を開けて庭を歩いて玄関にたどり着くのは、まるで「一軒家みたーい」だった。四回目の引っ越し先の家のことである。

友人たちも口を揃えて「一階はなにかと危ないよー」と言ってくれたが、耳を貸さなかった。「前も一階だったもん」と、私は強気だった。

その庭で、犬を飼いたかったのだ。午後の光を浴びて子犬と戯れる私の姿。しかし、その夢は不動産さんの「あっ、もちろん動物はダメだからね」のひと言で、シュワ〜っと消失してしまっていたが、心密かに「よしっ、家の中で猫飼ってやる」と思っていた。

そこに引っ越して一ヶ月くらいした頃、私は友人から待望の尻尾が黒くてお腹が白い日本猫をもらい受けた。名前は、昔好きだったNHKの人形劇の主人公からとって「プリンセス・プリン」にした。そのプリンの顔には口髭のような黒い模様があって、メスのくせに「風と共に去りぬ」のレッド・バトラーのように凜々しい容貌の猫だった。そいつは、はいたばかりのストッキングを爪ででんせんさせたり、布団におしっこをひっかけたりはしたが、それはそれは平穏な猫と私の生活だった。

ある夏の日、そんな日常を壊す出来事があった。家の近くでバッグの置き引きに遭ったのである。

電気屋さんの店先に、ポンッと布製のトートバッグを置いて、ちょっと目を離した隙の数十秒間のことだった。

すぐに「バッグがないっ」と気がついた私は、慌てて通りへ出た。

すると、チェックの赤いシャツを着た若い男が、三メートルぐらい先でのんきに私のバッグの中を覗いているではないか！

「あのおー、ちょっとおー」

と話しかけてみた。私も相当のんきである。まだこの時点では、『彼が自分のバッグと間違えたのかもしれない』と思っていたのだ。いや、そう思いたかった。

しかしというか当然というか、その赤いチェックシャツの男は私の声に一瞬ビクッとして、バッグを持ったまま、いきなり通りを走り出したのだった。

あとを追う私。「泥棒おーっ」と叫びたかった。「その人泥棒ですっ、捕まえてくださあーい」と大声で言いたかったのだが、そのとき情けないことに、震えて声が出なかったのだ。

それでもとにかく、追いかけて一本道を走っていた。心の中では『ドロボーだドロボーだドロボーだドロボーだ』と繰り返し叫んでいるのに、声が出ない。『なんでなんでなんで？ ドロボーって言えないのっ?!』。走りながら私は自分が歯がゆかった。

若い男の足にかなうはずもなく、住宅街に入った所で、その赤シャツの犯人を見失ってしまった。

どこかの家の軒下にでも隠れてしまったんだろう。一見何ごともなさそうにシーンとしているこの家々のどこかに、私のバッグを抱えて息を殺している泥棒がいる、と思うと他人事のように不思議な感じがした。

しかし、それから警察に行って、問われるままにバッグの中身を話し出してから私は青ざめた。

現金五千円入りの財布（ラッキー？ なことに当時学生だった私は、カードという贅沢なものは持ってなかった）、ハンカチ、ドロップキャンディまでは良かったが、スケジュール帳（日記も兼ねていた）と実力以上に撮れているオーディション用のポートレート、そして最悪なことに、生理用品と、アパートの住所入りのキーホルダーに当然付いている「部屋のカギ」が入っていたのだ。

お巡りさんは、あきれて言った。

「あのねえ、カギに住所書いたキーホルダー付けてどうすんの？ 仮に落としたんだとしたってよ、親切な人が届けてくれりゃいいけど、そうは世の中いないからねえ。普通、カギと住所は、通帳と印鑑ぐらい別々にしといていいもんだと思うよーっ」

「まったくその通り」であった。犯人は置き引きするぐらいの悪い奴なんだから、カギがあって住所がわかれば、きっと私の家へ泥棒に入ろうと思うに違いなかった。

おまけに、小首をかしげて「ウフッ」と思いっきりブリッコしている私の写真と、ひとり暮らしを容易に察することができるであろう日記の中身（「今日はお金がなかったのでご飯にチーズとおかかを混ぜてお醤油をかけて食べた。明日には仕送りが来るだろう」なんてことが書いてあった）、それから生理用品とくれば、まるで若い男の人を「おいでおいで」しているみたいではないか！

私は焦った。

「すぐに電話して、ドアの取っ手ごと鍵を取り替えなさい」

とお巡りさんは言った。それにかかる費用がとても気になったが、私にはそれよりもっと、わからないことがあった。

「電話って、どこへ？」

ドアの取っ手がどこで売っているのか、見当がつかなかったのである。

「金物屋さんだろ、やっぱり」

お巡りさんは親切に教えてくれた。

それから私は急いで大家からカギを借り、家へ戻った。電話で事情を話すと、金物店のおやじは飛んで来てくれた。

「かわいそうに、まったく物騒だよなあ」と言いながら、押しボタン式のドアのノブを、違う鍵穴のと取り替えてくれたのだが、しっかり代金八千円は受け取って帰って行った。

あの泥棒のせいで、財布の五千円と合わせて一万三千円も損したことになる！ と思うと、私はやり場のない怒りでいっぱいだった。

数日経った深夜に、やっぱりその赤シャツ男（と思われる）はやって来た。やっぱりというわりには、ドアの鍵を取り替えたぐらいで、何の対策もとっていないことに、私はこのとき気づい

たが、あとの祭りであった。

おそるおそるドアの覗き穴から見ると、犯人であろうそいつはガチャガチャと乱暴にノブを回している。

街灯の明かりを頼りによ一く目をこらすと、なんと！ 後ろにもうひとり仲間を連れているではないか！ そいつは、大きな紙袋を提げていた。

「ギャーッ、あ、あの中に、ナ、ナイフとか、てっ、手袋とか、ひっ、紐とか、いろいろないろいろ、はっ、入ってるんだあー！」

と勝手に想像して卒倒しそうになりながらも、這（は）うように電話機の所へ行き、必死の思いで一〇番通報した。

それから

「あっ、窓の鍵！」と急に不安になり、戸締りを一個一個確かめることにした。

そうっ、ここは一階だった。ドアだけじゃなく窓の心配もしなくてはならない。もしふたりが裏へ回ってこの大きい窓をぶち破って入ってきたら?! そう思うと恐ろしくて、私は猫を抱き布団を頭からかぶって、ガクガクと震えていた。

それは、ジャングルの中で猛獣に囲まれているような、孤立無援といった絶体絶命の気分だった。友人たちの「一階はやめときー」という意味がこのとき、身に染みてわかった私であった。

。

どれくらい経ったのだろう。そいつらふたりは、しばらくの間ドアをガチャガチャさせていたが、まさか鍵が替えられているとは思っていなかったのか、いくらやっても開かないので諦（あきら）めて帰って行ったようだった。

そのあとやって来たお巡りさんも結局、「それらしい人はいませんねえ」とほどなく帰ってしまった。

それから一ヶ月ぐらいは凶太く住んでいた私であったが、事件を機になぜか次々起こる出来事に、身も心も疲れきってしまった。

暑いからと小窓を開けていると、いつの間にか男の人がジーッと覗いていたり、酔っぱらいに家の壁をドンドン叩かれたり、干していた洗濯物を盗まれたりと、次から次へとひどいことが起きたのだ。

そしてやっぱり、「一階はやめときゃ良かった」と五回目の引っ越しを決意するのに至ったのである。

私が四回目のお引っ越しから学んだこと

一つ、女の方は、一階に住むべからず。

くしかし、二階三階だからといって安心して窓を開けられる、というわけではありません。私の友人は四階に、それも家族と住んでいたのに、配水管を伝って登って来た泥棒と遭遇したことがあります。でも一階よりは、上の階のほうが人目を気にせず伸び伸び暮らせるのは確かです>

二つ、動物を飼っても良い部屋はそうそうないと知るべし。

＜次の引っ越しで、「動物可」の部屋が見つからず、結局私も猫のプリンを知人に預けることになって辛い思いをしました。内緒で飼うとバレたときが大変です。壁紙や柱の引っ掻（か）き傷がひどいと、部屋を出るとき、敷金がほとんど返って来なかったりします＞



PHOTO



PHOTO



PHOTO



不動産屋さんに家を探しに行って、「職業は？」と聞かれるのが一番イヤだ。

「あのう、セイユーなんです」

私がおそろおそろ答えると、

「あー、スーパーのね。で、どこの店？ 何やってんの？」

と定番のように突っ込まれる。

「レジ係です」。ボケをかましつつも、慌てて訂正して、

「ニシのトモの西友じゃなくて、アニメの声なんかやってるあの声優なんですけど」

と言うと、決まって、

「ああ、自由業の方ね。一応、芸能界なんでしょ、そのセイユーってやつも」

とトタンにいい顔されなくなるのだ。

そして、「親は何してる？ 保証人はいるのか？ プロダクションに所属しているんだろうね？」。果ては「一度、家主に面接しといてもらおうかなあ」と急に審査が厳しくなってしまう。

手付金を払ったのに、「あとから来た人のほうが条件が良かったからと、家主に言われちゃったもんで」とキャンセルされてしまったこともあった。

後輩の子は「念のために預金通帳を見せてもらおうかな」とまで言われたそう。

かえすがえすも腹立たしい。ねっ、セイユーが何をしたって言うの？ けっこう地味な仕事なんだけどなあ……。

そういえばこんなこともあった。八回目の家探しで不動産屋さんを訪れたときの話である。そこで渡された用紙には、「名前、現住所」「希望する間取り（ワンルーム、1DK、2DK、3DKなど）と書いてあって丸を付けるようになっていた）、そして「職業」を記入する欄があって、私はそこに「声優」と小さく書いた。

すると覗き込んでいた担当のおじさんが、すっ頓狂な声を上げたのだ。

「えっ！ おたく声優さんなの？ ホントにい?!」

「ホッ、ホントですけど……、それが何か？」

「いやあ、うちのいちばん下の子供がさあ、今五歳なんだけどねえ、テレビのマンガにもう夢中なのよ。主題歌なんてすぐ覚えちゃうんだよねえ。で、何の声やってんのあなた？」

なんてことはない。ただの親バカである。

私はその当時放送されていた「ピーターパンのウェンディとかあー」と答えると、

「あーっ、うちの子、見てる見てる！ ねっ、ちょっとやってみせてよー。お願いっ」

とにじり寄って来た。

「ここですかあ？」と言いたかったが、下手に断って心証をまずくしてはいけないと思い、私は小さな声でアニメの女の子を演じてみせた。

「わたしウェンディよ。もうっ、ピーターパンったらあ〜」

「あーあーあーっ、それだそれっ、似てるっ（あのう、本人なんですけどお）……で、他には？」

」

おじさんは急に生き生きしてきた。

「他？ 他にはあ、おそ松くんのトトコちゃんとかあ」。イヤな予感がしてきた。

「あっ、やってやってー！」

気がつけば、店の社員が全員私の前に、目を輝かせて並んでいるではないか。

「トトコ、経済力のある人って好きいっ！」と役の決まり文句を叫ぶと勢いがついたのか、次から次へとキャラクターの声をやってみせたのだった。

『もしかしたら、とっておきの物件を出してくれるかもしれない』という下心の当然ながらあった。

店の人はみんな、拍手して喜んでくれた。

ああ、それなのにそれなのに、私が出した条件に合う部屋は、

「あーっ、うち、ちょうどそういうの、ぜんぜんないんだよねえ」

おじさんは素っ気なく言うと、さっさと奥へ引っ込んでしまった。

結局「骨折り損のくたびれ儲け」であった。

わたしゃいったい何をやっているんだらうと、ひどく虚しくなった帰り道、一大決心をした。

「いつか大きなマンションの大家になって、不動産屋さんにも店子にもデカイ顔してやるんだ」と。

「あらあ、うちは、一部上場企業の人じゃないと、ダメなのよねえ」なんてね。

未だにそれは、私の野望のひとつである。

私が八回目のお引っ越しから学んだこと

一つ、不動産屋さんはコネのきく所へ行くべし。

<友達が一回家を紹介してもらったでも何でもいいから、少しでも融通のきく所を探しましょう>

二つ、不動産屋さんへ行くときは、普段着で行くべからず。

<けっこう第一印象で判断されてしまいますから、この日だけは好きな人の親にでも会いに行くような優等生ぶりっこの格好をしましょう>

三つ、不動産屋さんへは、ひとりで行くべからず。

<むこうは、口の達者なプロの営業マンです。ともすると、ずっと借り手が見つからなかった部屋を、上手に押しつけられてしまうかもしれません。そんなとき、冷静な第三者の目で見られる友人が隣にいと、なにかと心強いものです>

「ドッヒャ〜！」

そのマンションの五階の部屋に、不動産屋さんに案内されて初めて入ったとき、私は腰を抜かしそうぐらい感動した。

新築らしく室内は真っ白でピカピカ、床はマホガニー色のフローリング、リビングの大きな窓からはきれいな川が見渡せ、真鴨が親子で仲良く泳いでいる。

そして何がびっくりしたって、とんがり屋根のようになっている、その天井の高さである。ここは教会か？ と聞きたくなるくらいなのだ。声が「ワウ〜ン」と反響する。引っ越し経験の豊富な私でも、これほど天井の高い部屋には、ついぞ巡り合ったことがなかった。

壁の上の方にはスタンドグラスにしたいような小窓も付いている。リビングだけではなく、和室の天井も同じ造りになっていた。

おまけに、屋根裏部屋風の梯子で登るロフトもふたつあった。『ひとつは物置にして、もうひとつは秘密の隠れ家にしよう』。子供みたいなことを考えて私はワクワクしていた。

もちろん（家賃が、ちと高い以外は）、こちらには何の文句もなかった。そのあとすぐ不動産屋さんと賃貸契約を結び、私は晴れてこの家の住人となったのだ。

しかし……、そのマンションには住んでみなけりゃわからない、数々の問題点があったのだった。

お化けが出るのではない（新築だってば）。

真鴨が来なくなったわけでもない（彼らは毎朝一列になって家の前の川にやって来て、私の投げるパン屑を競って食べていた。ときおり素潜りも見せてくれて、いつまでも飽きずにそれを眺めていたものである）。

騒音公害でもない（防音構造はしっかりしていた。各階のフローリングの間に厚い消音マットが入っていたくらいだ）。

日当たりが悪いわけでも（三方向に窓があった）、隣に怖いお兄さんが住んでいるのでもなかった（お隣には、有名企業の重役のお嬢さんが三人で住んでいた）。

ただ……………寒かった！ ……ひたすら寒かったのである。

真冬の朝、ファンヒーターを回して、ガス暖房を入れてもなかなか暖まらない。いく枚も着込んで、ダルマのような姿で歯を磨いたこともある。

仕事から帰って来てもしばらくはコートを着たまま、ご飯の支度をしなければならなかった。それぐらいその部屋は、寒かったのだ。

原因はもちろん、この天井の並外れた高さにあった。暖かい空気はどんどん上へ行って、足下はフローリングゆえにヒューヒュー底冷えがする。

なおかつこういうコンクリート建築の欠点として、気密性が高いぶん、新築後何年間かは湿気と結露がすごい。このマンションは特別ひどくて、毎晩、ジメ〜ツとした空気が立ちこめる寝室の、ジトツと重たい布団と冷たいシーツの間で寝なければならなかった。

朝起きると、窓のカーテンは結露でジャブジャブに濡れていたし、柱や壁にはびっしりと水滴が付き、床まで水浸しだった。その上、寒いのである。

夏は夏で、西側のブラインドを閉めて。クーラーの設定温度を十八度にしても、ぜんぜん冷えて来ない。これも天井が高すぎて、冷房の有効な許容範囲を超えてしまったからに他ならない。

そして冬と同様、電気代の請求書を見て、私は目ん玉が飛び出るほど驚いてしまった。恐るべし、天井の威力！

そんなこんなでやれやれと迎えた、秋のある日のこと。

何の気なしに見た和室の天井近くの小窓に、小さなベージュ色の不気味な物がのっかっているのを発見した。下からみる限りそれは綿ゴミのようでもあったし、枯葉のようにも見えた。ほんとはよく確認できないくらい小窓はかなり上の方に付いていたのだ。

そのときは「何だろ？」と思いつつも、ロフトの梯子を立て掛けて掃除するもの面倒だったし、「あとでいいや」と私はほったらかしにしてしまった。

何日かしてふと見上げると、その窓枠にへばり付いているベージュ色の物体が、初めて見たときよりなんとなく大きくなっているような気がした。

ジーッと見つめていると、それは、

「カサッ」

と微かに動いたように見えた。

「ゲーッ！ いっ、生きてる?!」

ということは、虫か？ ネズミか?!

どっちも遠慮したい私は、その部屋から急いで撤退し、ふすまをバンッと閉めた。何も見なかったことにしたいくらいだったが、そうもいかない。

「そうだ！ 誰かに来てもらおう」

こういうときは都内に住んでいる従兄弟に出動してもらうに限る。男なんだからさっさと片付けてくれるに違いない。

夜になって早速電話すると、会社勤めの彼は「週末にならないと、体があかない」と言うのだ。週末まであと三日もある。

「そこをなんとか」とお願いしても、「ダメ」の一点張り。私は他に頼めるあてもなかったのでしょうがなく、従兄弟の来る日を指折り数えて待つことにした。

しかし懲りない私は、自ら「あかずの間」にしたはずなのに翌朝になると、怖いもの見たさで、無性にその部屋を覗いてみたくなった。

「ちょっとだけよ」とソォーッとふすまを少し開けて片目で見上げると、その物はなんだかまた大きくなっているようなのだ。

「ゲー！ 育ってるう〜?!」

私の頭には、丸々太ったねずみの姿や巨大化した昆虫のさなぎが浮かんでいた。

「くわばらくわばら」とふすまを閉めて、その場で「早く週末が来ますように……」とお祈りをした。

さて待ちに待った日曜日、従兄弟はやって来た。彼は問題の和室の小窓を見上げて、

「なんだよおー、意気地ねえーなあ」

と笑いながら梯子を立て掛け、上へと登って行った。

「気をつけてねえ」と私が声を掛けると、

「へーき、へーき」とヘラヘラしている。

ところがその窓の所へ来ると、突然！

「ウワァー！」

と叫び、ハァハァ言いながら慌てて降りて来たのだ。

「なっ、なによ、なんなのよ！ その悲鳴は?!」

私はもうすでに廊下へ走り出て、ふすまの陰で震えていた。『や、やっぱり、さっ、さなぎだったんだあ！』

彼は青い顔してうろたえている。

「キッ、キノコなんだよおー」

「キノコオ？」

私はホッとした。虫やねずみの類じゃないとわかれば、こっちはもう簡単に気を立て直してしまう。

このマンションの異常な湿気が、実りの秋の気候と絶妙にマッチして、天井の窓に「キノコ」を生えさせてしまったのに違いない。

「それがダメなんだよお〜、オレはっ。菌とか孢子で繁殖するヤツが苦手なんだ。おまけにあんなにいっぱい……グェッ！ もうキノコなんて見るのもいやだあ〜！」

そうだった！ 彼と外で食事したとき、チャーハンに入っている椎茸をごく小さい物までレンゲできれいに選り分けているのを見て、感心したことがある。

「あぁーっ、気持わりい！ キノコだったら平気だろ菜桜ちゃん、あとよろしく！」

と言い残して、彼はお茶も飲まずあっという間に帰ってしまった。

それから私は早速梯子をよじ登り、きのこ見物に出掛けた。

これが長い間私を恐怖におののかせた物体か！ と思うと憎たらしくなったが、お腹が空いていたせいか、

「色の悪い舞茸に見えるこのキノコは、果たして食べられるのだろうか？」と考えたりしていた。

そして実りの秋が終わると、すぐにまたバカ寒い冬が来て、私は相変わらずの湿気と結露と電気代に悩まされたのだった。

おまけに、二年ごとの更新料（再契約をするという意味で必ず払わさせられるもの）が家賃の一・五倍（普通は一ヵ月分）というのも気に入らず、私は一年と半年でその家を引っ越した。

あとで知ったのだが、私の隣に住んでいたお金持ちのお嬢さんたちの何十万円もする着物や洋服が、あの湿気で黴（か）びて使い物にならなくなってしまい、頭に来たお隣さんは大家さんを相手に訴訟を起こし、今も係争中だという。

私はキノコぐらいですんで良かったのかな？ とも思うが、この一件で人と同じように家も、見かけや第一印象ではわからないものだとつくづく感じたのであった。

《お引っ越し道》って、本当に奥が深いのね。

私が九回目のお引っ越しから学んだこと

一つ、天井の高さと、暖房・冷房費は比例するものを知るべし。

＜必要以上にでかいワンルームにも同じことがいえます。だけど、そのほうがまだまし。だって横に広いぶんには物が置けますものね。天井はいくら高くても、けっこう使い道がないものです＞

二つ、鉄筋コンクリートの新築は湿気の多い所と思うべし。

＜対策としては、休みの日は窓を全部開け放ち、押し入れはできるだけ開けておくこと。それでもだめなら、除湿機を買いましょう。それとももちろん、上の階に行くほど、被害の程度が少なくてすむこともお忘れなく＞

三つ、ロフトというものは思っているより便利なものにあらず。

＜物置にしようと思っても梯子では、大きい荷物は運び込めません。運良く押し込めても、下ろすときにまた一苦労です。一度だけそこで寝てみましたが、忘れ物を思い出すたびに、梯子を使わなくてはならなくてイライラした上に、夜中トイレに行きたくなって下を見ると、梯子が落ちこちてしまって、私はロフトの縁にぶら下がり、飛び降りるしかありませんでした。＞

四つ、契約書は面倒くさくても、よく目を通すべし。

＜敷金、礼金が普通より多い（関東は一般的に、それぞれ家賃×二ヵ月ずつ）のは、すぐわかるものですが、何年かしてその家を出ていく際の引っ越しの告知日（普通は一ヵ月前に大家に申し出る）までは気がつかずなったりします。私もそれが、二ヵ月前と書かれているのを見落として、一ヶ月間、元の家と新しい家の二件分の家賃を払うハメになり、自分の馬鹿さ加減にもの凄く腹が立ちました。更新料も気をつけてね＞

昼下がりの団地妻

昔から団体旅行のバスや電車の中で、誰が言い出すことなく始められるものの定番中の定番に「しりとり」がある。

「歌しりとり」「人名しりとり」「花の名前」や「食べ物しりとり」といろいろあるが、かつて業界で流行ったのは「いやらしりとり」という、とんでもないものだった。

実は、これが意外に奥の深い、「知的ゲーム」だったのだ。

文字通り、ただ単に「Hな言葉」をしりとりしていくわけなのだが、ストレートにいやらしいのは「芸がない」ゆえに認められないという、ファジーなルールがあった。判定は、そのつど参加者同士で行われる。

たとえば「オッパイ」は、「まんまやんけ！」とか「あんまし、いやらしくないような気がする」などとケチをつけられ、ブ～ッと却下されてしまったこともあった。

当然、下ネタは、ボツである。センスと品性が要求されるのだ。

「昼下がりの団地妻」は、文句なしにOK。「放課後」や「ボディピアス」っていうのも、「なかなかいいセンってる」ということになる。ちょっとした、ひねりが必要なのだ。いうなれば、AV（アニメビデオではない）のおしゃれなタイトルを「しりとり」するって感じかもしれない。しかし以前に、なぜだか理解できないが「ナス」というのが通ったことがある（私が言ったんじゃないからね！）。

「イヤンバカンス」も笑いがとれたら合格だ。

とにかくやってみればわかるけど、このゲームほど性格と感性とオツムの程度がバレバレになってしまうものは、他にはないだろう。ヘタなことは言えない。

「カマトトぶってんじゃないよ」

「あっ、松井さんてこの程度なのね」

と思われるのもシャクだけど、

「すげ～っ、オトナじゃあ～ん！」

と驚かれるのも困る。この加減が難しいのだ。

順番が回って来るたびに、ドキドキハラハラ、お遊びとはいえ緊張したものである。

前に、このしりとりで苦し紛れに、

「か～、か、かだろ？ かあ～、看護婦！」

と言った男の人がいた。

「そのどころが、いやらしいのか？」

みんなに責められた彼は、仕方なく自分の体験談を話すはめになってしまったのだった。

ねっ、めったなことは言えないでしょ？

おかげでその日から、私にとっても「看護婦」は、ちょっぴりHな言葉になってしまった。

ああっ、白衣の天使さん、ごめんなさいっ！

墮ちて行く私

私の転落の歴史は、ここから始まった。

今からおよそ三十年前の、ある晴れた日曜日のこと。

当時小学五年生だった姉は、生後間もない赤ん坊の私を乳母車に乗せ、いつものように子守をさせられていた。

この頃彼女は、キャーキャー泣き叫ぶひと回りも下の妹の面倒をみることに、ほとんど嫌気がさしていたらしい。

「あー、こいつさえいなければ……こいつさえいなければ、もっと自由に毎日遊べるのに……」

そして姉の脳裏には、そのとき恐ろしい考えが浮かんだのだった。

私の生まれた函館は、坂の多いエキゾチックな街である。

坂の上から見る港の景色は、のどかで美しく、人を穏やかな優しい気持ちにさせてくれる………
…はずなのに！ 私の姉ったら、坂の上から乳母車を、港めがけてつき飛ばしたのだ！ 当然乳母車はガラガラと音を立て、次第にスピードをつけて勢いよく遠ざかって行ったらしい。

「まっ、あのとき道に大きな石でも転がってたら、今頃あんたはここにいないわねえ」

とその後、姉は煎餅を齧（かじ）りながら、しみじみと私に語った。

しかし、通りかかった人は坂を転がるように落ちて行く暴走乳母車を見て、なんと思ったことだろう。

「ねえ、どうやってそれは止まったの？」

私はおそるおそる尋ねた。

「坂っていっても大したもんじゃなかったし、途中からすぐ平らになってたから、自然に止まったんじゃないの？ それぐらい私も計算してるわよ」

と姉は言ったが、最後のほうのセリフは怪しいものである。

まっ、とりあえず生きてて良かった。

こうして私の転落の日々への幕は、切って落とされた。

乳母車の転がり落ちるスピードとスリルが癖になったわけではないだろうが、私はしょっ中階段から落ちたり（螺旋階段の上から下まで転げ落ちて気絶したこともある）、なんてことない道で転んだり、池へ落っこちたりする子供だったのだ。当然、生傷は絶えなかった。

小学二年生のある朝のこと。

私はランドセルを背負って、隣の同級生の家へ向かっていた。

「久う仁い子ちゃん、おっはあよおー」と、学校へ誘いに行くその途中、まだ舗装されていなかった自宅前のじゃり道で、私はどういうわけか突然スキップがしたくなった。

「スキップ、スキップ、ルンルンルン！」と、ひとり踊っていたら、その「ルン」のところで足が絡まり、前向きにバタッと転んで、大きな石の角に思いっきり頭を打ちつけてしまった。

「痛あ〜いっ！」。倒れたままぶつけた額に手を当てると、又ルッと生温かい感触がある。見れば手のひらは、真っ赤な血で染まっているではないか。そんなに痛くなかったのに、急に恐ろし

なくなった私は「ギャ〜ッ！」とわめきながら自宅へ駆け込んだ。

両親はびっくりするほど冷静に、そして迅速に私を抱えて車に乗り込んだ。

しかし、一軒目病院では、早朝ということもあり「まだ外科の先生が来ていないので」と断られてしまった。

母は車中で「ここの病院には二度と来ないっ」と、かなり怒っている。

私は額に当てたタオルが血で染まっていくのを感じつつ、

「ああ、これがテレビでよくやっている『たらいまわし』というやつなんだわ」

雨の降る夜に、高熱を出した子供を抱いた母親が病院のドアを泣きながら叩（たた）き続ける映像が浮かんで、気が遠くなりそうだった。

すると父が、運転席からこう言った。

「心配するな。たいした怪我じゃないんだから、頭は血が出やすいもんなんだ」

「そうなの？」。私は信じられない気持で呟いた。

ほっとした反面、こんなに血が出てるのに「たいしたことない」なんて言われるのは、とても心外だった。『死ぬかもしれないと思ってたのに』。

二軒目の病院で、私の傷口を見た先生は、

「んー、三針ぐらい縫ったほうがいいな」

と、さらりと言った。

「縫う?! 針で?! 生地を縫うみたくな?!」

それを聞いた私が泣き叫ぶわ、大暴れするわで、手足を看護婦さんたちに取り押さえられつつ手術を受けたことは言うまでもない。

病室のベッドで目が覚めると、母がニコニコして覗き込んでいるのが見えた。

「よかったねえ、骨も異常ないみたいよ。もう帰っていいって」

母はさっさと身支度を始めた。

「えっ? もう退院なの?!」。初体験の入院生活がたった数時間で終了してしまう!

「パパはどこにいるの?」

と私が聞くと、

「会社に行ったに決まってるじゃない」

とつれない返事。おまけに母は、

「けっこう近いから、家まで歩いて帰ろう」

と言ったのだ。

『そんな! タクシーにさえ乗れないなんて! 三針も縫う大怪我をしたのに、あんなにいっぱい血が出たのに、誰も心配してくれないっ!』

額に貼られた大きな絆創膏みたいなのも気に入らなかった。『なんで包帯じゃないのっ?』これでは、ただこぶが出来た程度に見えて、お見舞いに来たクラスメートに「なーんだ、たいしたことないじゃない」と、思われてしまうではないか。

しかし、事はそれどころではなかった。母が追い討ちをかけるように言った。

「あっ、先生がね、おとなしくしてれば明日から学校に行ってもいいって」

「……………」

怪我のショックからすでに立ち直っていた私は、「悲劇のヒロイン」になりそこなった自分をひしひしと感じていた。

ところが、家で布団に横になっていると、母が思わぬことを言って来たのだ。母のこの発言が、ふたたび「悲劇のヒロイン」へのひとすじの光を私に与えることになった。

「病院の先生がね、『ただ転んだにしては傷がちょっと変だな』っておっしゃったのよねえ。『どういうことですか？』って聞いたら、『誰かに石でもぶつけられた可能性はありますか？』って言うのよ。ねっ、菜桜ちゃんほんとのところはどなの？」

母は、探るような目で聞いてきた。

ほんとも何も、「調子にのってスキップしてたら足が絡まって転んだ」以外の何ものでもなかったが、そのあまりにお間抜けな答えを言い出しかねて、私はしばらく口をモゴモゴさせていた。

すると、母はそれを『もしや石を投げた相手をかばってるのでは？』とでも思ったらしく、「わかった、じゃ、パパに連絡して、ワタル君人形買ってきてもらうから、そうしたら、ほんとのこと、話してくれるかなあ？」

と言って来たのだ。これがいけなかった。母も罪なことをするものよ。

その当時、リカちゃん人形のボーイフレンドである色黒でハンサムなワタル君は、お友達の間で欲しい玩具の人気NO・1であった。私も「みんなが持ってる」とっては、母に何回かねだっていたのだ。

「ねっ、ワタル君がいいよね？」

母は明るく念を押した。私は下を向いたまま、

「うん」

と頷いた。

夕方になって、姉と兄が学校から帰って来た。ふたりは母から事情を聞いたらしく、すぐに私の枕許へ飛んで来た。

「誰がやったか、言ってごらん！ 近所の子なのっ？」

かたきをとってやるとでもいうような剣幕である。

もうすっかり私は「スキップをして転んだ単なるおばか」ではなく、「何者かに石をぶつけられた可哀相な被害者」になっていた。

「転んだんだってばあ」というひと言によって、みんなにチャホヤしてもらえるヒロインの座から引きずり下ろされることになるのは、目にみえている。そしてそうやってしまうより、今の展開のままにしといたほうがはるかにドラマチックであった。

それで私は、

「あのね、よく覚えてないの」

と言って、お茶を濁すことにした。

そうこうしてるうちに父が、珍しく早く帰って来た。もちろんおみやげのワタル君を持ってである。

待望のワタル君を手にした私はもうそれに夢中で、すっかり他のことはどうでもよくなって

しまった。

「石を投げられたのか？ そうだとしたら、誰かを見たのか？ 知ってる人か？ 男か女か？」

という矢継ぎ早の父の質問にも、

「ううん、誰も見てないよお」

ほとんどどうわの空で、人形をいじりながら、あっけらかんと答えていた。

すると父は、

「じゃ、その石は遠くから来たのか、近くから来たのか」

と聞いてきたのだ。

こんなことから早く開放されて、リカちゃんハウスでワタル君と遊びたかった私は、思い悩んだあげく、少女マンガに出てくる記憶喪失の人のまねをしてみることにした。

「もしかして転んだのかもかもしれないんだけど、思い出そうとすると頭が痛くなるの」

未恐ろしい奴である。

父はそれ以上何も言わず、それから茶の間へ行って、

「菜桜子は転んだショックで少し混乱しているから、そっとしておくように」

とみんなに告げたいらしい。

こんな傷だらけの子供時代を送った私も、中学生ぐらいになると、めっきりドジを踏まなくなり、

「あー、私も大人になったなあ……」

とかさぶたのない膝っ小僧を撫（な）でながら、妙に感傷的になったものである。

それにしてもあんなに頻繁に、転んで頭を打ったり、階段を頭から転げ落ちたりという、私の転落の過去がなければ、もう少し学校の成績も良かったのではないかと思うと未だに残念でならない。

私に似た人

泉ピン子、一キロメートル先から見た本田美奈子、若乃花関のお嫁さんの栗尾美恵子、みなしごハッチ、工藤夕貴、可愛かずみ、紺野美沙子、川上麻衣子、中島はるみ、カメ、ヒラメ、エイ、ウーパールーパー、ネオンテトラ、エリマキトカゲ（敬称略）。

以上は、私が過去に一回でも「似ている」と言われたことのある方々の名前である（まっ、なかには、異論を唱えたい人もいるでしょうが）。

ウーパールーパーが、一躍アイドル動物としてもはやされたときには、「ウーパールーパーちゃん」とあだ名を付けられたりして、喜んでいいのか悲しんでいいのか、複雑な心境になったものだ。

私がウーパールーパーの実物を初めて見たのは、ブームもとっくに過ぎた頃、旅行で行った温泉地のホテルでだった。玄関の隅の薄暗がりに、ひっそりと忘れられたように水槽に入れられたウーパールーパーがいた。

噂にたがわず、そのつぶらな目と目の間はしっかり離れていた。「菜桜子の目の間で待ち合わせをしたら、広すぎて相手と会えないらしい」というギャグまである私は、ウーパールーパーに会ったとたん、なんだか離れ離れになっていた妹（弟？）を捜し当てたような気がした。私たちはジーンッと見つめ合ったまま、しばし身動きができなかった。

最近、七十年代のファッションが流行っているせいか、奥村チヨさんをテレビでよく見掛けるようになった。

すると急に周りから、彼女に「似てる！ 似てる！」と言われ出したのだ。

乗りやすい私は、カラオケで『恋の奴隷』や『終着駅』をマスターして、受けを狙っているが、この歌マネがけっこういいセンっているらしい。音域も声質もピッタリで歌いやすいのが勝因だろう。

そういえば、アニメや洋画でも、外見が自分とどこか共通しているキャラクターを配役されることが、なぜか多い。骨格が似ていると、声のイメージまで似てくるものなのだろうか。

しかし逆に、まるで似ていないものを似せようとするのは、かなり骨が折れることである。

もう何年も前の話だが、ナレーションの仕事で、有名人の物真似を要求されて、ほとんど困ったことがあった。

それは「何とか博」とかいうイベントのラジオCMで、「〇月〇日、いよいよ開催です。皆様のご来場をお待ちしてまーす！」なんていうコメントを読めばいいはずだった。

スタジオのブースの中で、私が何回かコメントのテストをしていると、

「うーん、もう少し聖子ちゃんに似せて、読んでもらえないかなあー」

とディレクターが言って来たのだ。

「へっ？」。目が点になった。

たしかに、その「何とか博」のイメージタレントとして松田聖子さんが起用されていて、テレビでイメージソングも歌ってはいたが……。

「あっ、聞いてない？ 松田聖子ちゃんに声が似ている人って、事務所に頼んだんだけど」

ディレクターは怪訝（けげん）そうに言う。

私は、事の次第を素早く察知した。うちの事務所のマネージャーは、「聖子ちゃんに声が似ている人」というディレクターからの要望に対して、「いつもカラオケで聖子ちゃんの歌を歌っている松井菜桜子」がポツと頭に浮かんだのだ。いや、きっとそうに違いない。

「あのおー、よくう、カラオケでは歌ったりするんですけどお、でも、声なんて全然似てなくてえ、彼女は少しハスキーボイスでしょう？ 私はあ、どっちかというとおー……」

グチグチいいわけをした。するとディレクターはとんでもないことを言って来たのだ。

「じゃあ、ちょっとここで一曲歌って、気分出してみてよ」

「なんで私が、そんなことまでせにゃならん！ それじゃあ聖子ちゃん本人に頼めばいいじゃん」と言ってやりたかったが、そんなことを言えば、「予算とスケジュールがとれないんだよ」という悲しい答えが返って来るのは、容易に推測できた。これ以上ガックリきたくなかった私は、開き直って『青い珊瑚礁』を熱唱してやることにした。

しかしやっぱりその歌も、そのあと読んだナレーションも、ちっとも似ていなかった。それでも「汗と涙と努力」だけは認めてもらえたようで、スタッフからねぎらいの言葉をいただいて、私は帰路についたのだった。

私のように、いろいろな人に「似ている」と言われやすい人間もいれば、「その人って誰に似てるの？」と聞かれて、たとえがぜんぜん思い浮かばないタイプの人間もいる。どっちが得なのかはわからないが、その人に「似ている」ことで、なんだか自分のことのようにいい気持ちになれるときがあるものだ。

表彰台のいちばん上で、うれしそうに金メダルをぶら下げている女の子が、ブラウン管に大写しになったとき、私は思わず、「あっ」と声を出してしまった。

その子は、子供の頃の私に、うりふたつだったのである。それはもうっ、そっくりとか似てるとかいう次元じゃなくて、まるで若き日の私そのもの。北海道の両親からも「ねっ、見た？ あんたにも水泳やらせておくんだっ！」と、興奮してわけのわかんない電話がかかってくるくらいだったんだから。

私が似てるのか、むこうが私に似てるのか。

その人は、三年前のバルセロナオリンピックの女子平泳ぎの金メダリスト、岩崎恭子ちゃん、当時十四歳。

その翌日、アニメの仕事で録音スタジオへ行くと、来る人来る人私の顔を見るなり、

「よおっ、いつスペインから帰って来た？」

「金メダルおめでとう」

「生きてるうちで、いちばん嬉しかったんだって？」

ひどいものになると、

「おまえも昔は、あんなふうに初々しかったよなあ」。大きなお世話である。

「あのあとすぐ、バルセロナから専用機で帰って来たんですう」

と、何人の人に答えたかしのれない。

お調子者の私も、さすがにそのネタに飽きて来ていた、ある日のこと。

日曜日のせいか、ガラガラの総武線に乗って、私は仕事場へ向かっていた。両国あたりで、品の良い老夫婦が乗って来て、私の向かい側の席へ座った。

しばらくすると、その老夫婦が何やらヒソヒソと内緒話を始めた。本人たちは内緒話のつもりでも、静かな車内のこと、向かいの席の私には丸聞こえ状態であった。

「ばあさんっほらっ、前に座っている女の子、何て言ったかなあ？ ほらっ、あの子に似てるよ、あの子にほらっ、えーっと……」

「いやですよお、おじいさんたら、そんなにジロジロ見たら悪いですよっ」

「しかしよく似とる。ほらっ、何て名だっ？ あのっ、ほれっ、こないだ平泳ぎで金メダルとった……んーっ」

「あああっ、そういえばそっくりねえ」

「えーっっ、ほれっほれっ、んーっ、んんんっ、出てこんっ!!」

こんなことを、目の前で延々やられてごらんない。

私はお尻のあたりがムズムズしてきて、『えーっっ、もう我慢できないっ!』

「それはもしかして、私が岩崎恭子さんに似てるというのではないですかあ？」

とデカイ声で言ってしまったのだ。

すると、おじいさんはえらく喜んで、

「そうだっ！ 岩崎恭子だっ」

どうしても思い出せなかった名前がやっと出て来たので、胸のつかえがとれたようだった。

ここで黙ってしまうのも、なんだか気まずいので、

「よく似てるって言われるんです」

と私が言うと、

「おじいさんっ、よくねっ、言われるんですってっ！」

おばあさんは、嬉しそうに繰り返して言った。まるで「私たちは間違っていなかった」と言いたげに。

老夫婦はその後、

「どうもありがとう」

といく度もおじぎをしながら、お茶の水駅で降りて行った。

私はなんだか、とても良いことをしたような気になった。

「鏡よ鏡よ鏡さん、世界でいちばん可愛い女の子はだあれ？」

「それは、菜桜子さん、あなたです」

今思えば図々しいにもほどがあるが、ある時期まで私は本気でそう信じて疑わないオメデタイ奴だった。えっ？ 何を信じていたのかって？ だからあ、世界一可愛いのは自分だと、マジで思っていたんだってば（キャ～、お願いっぶたないでえ）。

テレビや雑誌を見ても私の自信は、どういうわけかこれっぽっちも揺らがなかった。どんな超一流のモデルや女優も「たいしたことはない」と感じていたのだ。

「化粧も濃いし、おっかない顔おお。やっぱり可愛さでは私にかなわないわ。ウフッ」

私にとって、「プリティ」は、「ビューティフル」の上をいく、最上級の美を表現する言葉だった。

根拠のないその確固たる自信に、陰りが射し込んできたのは、中学生になって、しばらくしたある日のことだった。

クラスの男の子たちが「すっげ～色っぽい」とか「憧れちゃうよなあ」と噂していた三年生の北村先輩と、トイレの洗面所でその日偶然、初めてのご対面となった。

私は対抗意識を丸出しにして背中をシャンと伸ばし、「フンッ」てな目付きで彼女を威嚇（いかく）した。ほらっ、この評判の先輩に、『世界一キュートな女の子の存在を、知らしめておく必要がある』と思ったのだあねえ。

洗面所の鏡に映る彼女を、私はこの機会に観察することにした。

『ふんふん、まっ、スタイルがいいのは確かだわね』

北村先輩は、ショートヘアの背の高いグラマーな女の人で、目はクリッと大きく、鼻もスツとしてて、彫りの深い、今思えばかなりの美人。にもかかわらず、私の結局の感想は、「なんだか老けてない？」であった。

あんまりジロジロ見ていたので気がついたのか、鏡の中で視線を合わせた彼女がツカツカッとやって来て、すぐ隣で立ち止まった。

そして、ニッコリと微笑み、私の頭を撫（な）でながら言ったのだ。

「まあ、可愛い子ねえ」

私は身動きができなくなった。子供扱いされて怒ったのではなく、ライバルの意外な発言と、見上げたときに飛び込んできた彼女の包み込むような愛らしい笑顔に、びっくりしたのである。キラキラと輝く瞳が目に焼きついた。

近くで見ると、髪は栗色で、肌は透き通るように白く、そしてふくよかな胸は優しく揺れている。クラスの男の子たちが騒ぐわけが、なんとなくわかった気がした。ショックであった。私と全然似てないのに、それでもこれほど魅力的な女の人が、こんなに身近にいたなんて。

自分とは違う種類の「ビューティフル」もほんの少し認める気持になると、急に心配になってきた。『世の中には、北村先輩のように性格も良くて、きれいで可愛い女の人が、探せば大勢いるのではないだろうか』。

私の心に、少しずつ謙虚な気持が生まれていくのがわかった（遅いんだよ）。

『私は……』 『私は、世界一可愛いのではなく、もしかして……日本一ぐらいなのかもしれない』（だめだこりゃ）

家へ帰ってから、「私は、しょせん、日本一程度なのかも」と、今日の北村先輩の話をもとに姉に伝えると、ふたりは大笑いするばかりである。私は憤慨した。

「何がそんなにおかしいのよっ」

すると姉は、ピタッと笑うのをやめて、

「ねっ、菜桜ちゃん、あんたほんっきで、自分が世界一可愛いんだって思ってたの？」

とあきれたように聞いてきたのだ。

「うん」。当然じゃないと頷くと、また姉は「ガハハハ」と笑い転げた。私はムキになっていた。

「だって、だって、だって、おかあさんが、いつも『菜桜ちゃんは、世界一可愛い』って言うてるじゃないのよお」

そう、年の離れた末っ子として生まれた私は、母から事あるごとに、

「可愛い、可愛い、あんたは世界でいちばん可愛いわあ」

と十数年間言われ続けて大きくなったのだ。私はその言葉をただ信じて、これまで生きてきただけである。姉はまだ笑い続けている。

しかし、母はもう笑ってはいなかった。かなり慌てた様子で、

「あのねっ、菜桜ちゃん、ちょっと誤解があったようなんだけど、おかあさんが『可愛い』って言ったのは、おかあさんにとっては、っていう意味なの。よその人がどう思おうと、おかあさんにとっては、菜桜ちゃんは世界一可愛いってことなのよ」

母は諭すように言った。

「そうだったのおおー？ よその人はそう思ってないのお～?!」

青天のへきれきとはこういうことをいうのだろう。

「じゃ、ホントのところ私は、世界一どころか日本一ですらなかったのか?!」。私のアイデンティティがガラガラと音をたてて崩れて行くようだった。

「そうならそうって、最初から、言ってよね～」

母は（そういう気はまったくなかったのだろうが）いうなれば「あんたは世界一可愛い」という洗脳を、日々私にしていたようなものである。

そして長い年月かけてその言葉は、私の中にごく自然に浸透して、確固たる自信を築きあげていった。

「そうだ、私は世界一可愛いんだ」

だから、テレビにどんなアイドルが出て来ても、都会からあかぬけた転校生がやって来ても、「ハンッ」と高ピーな態度で動じることなくいられたのだ。一分の疑問の入り込む隙もない、この鉄壁の自信、これを洗脳と呼ばずして何と言う。

しかし、「教祖」である母は、

「そうではなくて……」

と簡単に「教え」をひるがえした。

どっかの宗教団体の末端信者のように「そんなはずはない」と、にわかには信じられない気持ちだった。

私はその晩、寝込んでしまった。

そして二十年経った今でも、マインドコントロールの恐ろしさを実感することがある。頭のどっかの片隅に「世界一可愛い自分」というフレーズが残っていて、それが日常生活のふとした拍子にひょっこり姿を現すのだ。

「これって、私のために作られた服のようだわあ」と、ブティックで鏡に映る我が身にうっとりしたり、「わあ、可愛い〜」という声がどこからか聞こえると、「えっ、私ですか？」と思わず振り返ってしまう。そのたびに、そばにいた友人たちから「ねっ、菜桜ちゃん、その自信はどこから来るの？」とあきれられるのだ。

しかし先日、三つ年上の従姉妹が電話で思わぬことを言い出して、私は自意識を満足させるとともに、なんだかくすぐったい気持ちになった。

「私ね、娘が菜桜ちゃんのように育ててくれたらって願っているの」

彼女は、三歳になる我が子に毎日、

「おまえは世界でいちばん可愛いねえ」

と呪文のように言い続けているというのだ。

「そう思い込ませて育てれば、もとはたいしたことなくても、きっと菜桜ちゃんのように明るくて、華のある子になってくれると思うのよねえ」

その「もとは云々」というところが多少ひっかかったものの、私はたいそう感激した。なんだか、その子の成長が今からとっても楽しみな「初代・世界でいちばん可愛い私」である。

ヒールのサンダル

銀座の「イタリー亭」ではなく、練馬の「イタリー亭」というスパゲティ屋さんで、養成所に通う十八歳からの二年間私はバイトしていた。

「アルバイト、ウェイトレス募集、時給四八〇円」の張り紙を見てふらっと入ったその店は、二十坪ぐらいのこぢんまりした、ひと昔前に流行った喫茶店のような感じの店だった（テーブル式のテレビゲームもあった）。

なぜかいつも頭にスカーフを巻いて決して髪を見せない、三十代後半のママ（スナックでもないのでなぜかこう呼べと言われた）と、商社に勤めていた元ラガーのマスターが、交替で出て来ていた。このふたりは妙にワケありふうで、ほんとのところ夫婦だったのかどうか未だによくわからない。ただ、コーヒーは美味しかったし、スパゲティもアルデンテに茹であがって、けっこういける味だった。

なかでも鉄鍋に入った「ミックススパゲティ」というやつは、スパゲティの上に二種類のソースが左右別々にかかっているもので、ミートソースに飽きてきたかなあっている頃に、ホワイトソースで口直しをして、最後にミートとホワイトがぐちゃぐちゃに混じった微妙な味が楽しめるという、ひとつで三回美味しいスパゲティだった。

さてバイト初日、ママさんの言いつけ通り、ヒールのサンダルとエプロンを持って出勤した。昼食時の忙しいピークも過ぎて、やれやれとカウンターで、出されたカレーライスを食べていると、たばこの煙をふかしながらママが話しかけて来た。

「でもさあ、あんたもよく東京に出て来たわよねえ。私もいろいろ知ってるけど、役者になりたいなんて、大変よおっ。よっぽどキレイでもなくっちゃねえ」

いきなりグサっとくることを言う。私は黙ってカレーを食べているしかなかった。

「親もよく北海道から娘ひとり出したもんねえっ。心配してんだろうに。あたしが親なら、絶対東京なんて行かせないわね。函館だっけ？ 実家？ いいところじゃないのよお。なにも好き好んで苦勞することないって。人間分相応ってもんがあるんだから。あんたもそんな大それた夢、諦（あきら）めるなら早いほうがいいわよお。若いうちならいくらでも潰（つぶ）しがきくんだからさっ」

食べてたカレーも辛かったが、「わかっちゃいるけどやめられないのよ、それを言っちゃお仕舞いよ」レベルのことを言われたのがけっこうきつくて、私の簡単に出てくる涙が、ジワジワを溢れてきた。

「やっぱり地道な仕事がいちばんよお、地道ってやつがさあ。ねえ聞いている？」

私が黙っているのをいいことに、ママの話はどんどんリキが入ってきて、いつまでも続きそうだった。

だんだん腹が立ってきた。『私の一度しかない人生なんだ。あんたの狭い見と経験だけでケチつけられちゃたまらないっ』

それに、毎日こんなこと言われ続けて働くのはイヤだった。カーツとなった私は、「やめさせていただきますっ」

ときっぱり言って扉の方へ走り寄ったのだが、慣れないヒールのサンダルを履いていたせいか、敷居の所で不様（ぶざま）にすっころんでしまったのだ。

頭に来て、「こんなものっ！」とサンダルを脱ぎ捨てると、出だすと止まらない涙を流しながら、商店街の坂を駅の方へ駆け下りて行った。ハァハァ息を切らして立ち止まり足下を見ると案の定、私は裸足であった。

落ち着いてよく考えてみれば、来るとき履いて来たスニーカーと、コートと鞆を店に置きっぱなしである。どんなにくやしくても一回は、取りに戻らなくてはならない。

「あーバカなことした」と私は思い始めていた。せめて靴を履いて出る思慮深さがあったなら……。裸足の寒そうな白い足が、自分自身の惨めさを一層深いものにしていて。

とぼとぼと坂を戻りかけようとする、ポンツと肩を叩（たた）く人があった。振り向くと、店のママが私のサンダルを手にして立っているではないか。

「びっくりするじゃないよお、いきなり出てっちゃうんだもん。あんた走るの速いっちゃねえーっ」

ゼィゼィ言いながら、東北生まれのママはお国言葉を混じらせて言った。

ママと私は、それから何も言わずに店へ向かって歩きだした。

そして少し行くと、ショーウィンドーの前で急にママは立ち止まって、

「あっこれ可愛い」

と言うなり、ブティックの中に私を引っ張り込んだ。

「うんっこれがいい、あんたにはこれが似合うよ」

あぜんとしている私に言葉を発する隙も与えず、茶色の熊の模様がいっぱい入ったセーターを、あっという間に買ってしまったのだった。

この日の出来事はママと私の間で二度と語られることはなかったが、驚くべきことにそれ以来、彼女は私の応援団のように、叱咤（しった）激励を飛ばし支えてくれる存在になったのである。

「あんな前しか見えない子供っぽいときが、私にもあったなあ……」

とママはみっともなくも必死な私の姿に、自分の若い頃を重ねてくれたのではないかと、今の私はしみじみ思うのである。

事件は小学一年の夏、初めてのプール学習の日に起こった。

私は、買ってもらった真新しいスクール水着が嬉しくて、朝から家中を水着姿で走り回ったり、絨毯（じゅうたん）の上につ伏せになって泳ぐまねをしてふざけていた。

気がつけば、時計は学校へ行く時間を指しているではないか。

「遅刻するわよっ」と母に追い立てられて、私は慌てて身支度を始めた。

そしてそのとき、ふと、イイことを思いついたのである。

「そうだっ、一時間目がプールなんだから、このまま水着の上に服を着ていけばいいじゃん」

我ながらなんて頭がいいんだろうと感心してしまった。これなら、脱ぐだけですぐ水着になれるし、荷物も少なくてすむのだ。

初体験のプール学習は何事もなくほとんど水浴び程度で、遊んでいるうちに終わった。

みんなで更衣室へ戻ってシャワーを浴び、タオルで体を拭いて、さあ、服に着替えるか、という段になって……私は愕然とした。

「パ、パ、パンツがない！」のだ。

いくら探しても、それは出てこなかった。

だいたい、もともとあるはずがない。よく考えてみれば、最初っから、はいて来てないんだし、持って来てもいなかったのだから。この日の朝、ルンルンしながら水着の上に服を着た私に、プール学習のあとに必要となる「パンツ」のことを考える余裕はなかった。

タオルにくるまったまま、しばし茫然と立っていた。お友達はとっくに着替え終わっている。『どうしよう？』

ここで私は、ある選択を迫られた。パンツの代わりに、脱いだ水着をもう一度着てからスカートをはくか、それとも思いきって、「ナシ」でいくかである。

髪の毛からしづくがぼたぼたと肩に落ちて、それでなくとも寒気がしているのに、今更ぐっしより濡れた水着を身につける気にはとてもなれなかった。

『ナシでいくしかない』

私は悲壮なる決断をしたのだった。

それからは極端に無言になった。どうも下半身がスカスカして落ち着かない。

そしてみんなの視線がやたらと気になっていた。残された三時間の授業を、無事バレることなくクリアして、走って家へ帰りたかった。

「早く終われええ、早く終われええ」と念じて、授業などうわの空である。

そうこうしているうちに、四時間目の終了を知らせるチャイムがやっと鳴った。やれやれとほっとした私は「先生さようなら」のご挨拶もそこそこに、誰よりも早くランドセルを背負い、校門へと駆け出した。

外へ出て、今まさに我が家への直線コース数キロの道をダッシュ！ しようとしたとき、後ろから「なおちゃあ～ん、待って～」という声とともに、バタバタとお友達のK子ちゃんとA夫くんが現れた。

「もうっ、なおちゃんなんで先に行っちゃうの？」

K子ちゃんは私の気も知らず、プンブンである。三人は家の方向もお掃除の班も同じだったので、よくつるんで帰っているのだ。

そして私は密かに、幼稚園から一緒だったこのA夫くんに対して、ほのかな恋ごころを抱いていたのだった。

だからあ、今日はひとりで帰りたかったのにいいい！

私の心臓は爆発しそうなくらいドキドキしました。『もし、ハイテイナイことがA夫くんにはばれちゃったら……』。そう思うと、目の前が真っ暗になった。

「ねえ、なおちゃん、なんでそんなに速く歩くの？」

K子ちゃんはハアハア言いながら私に歩調を合わせ、不審そうに顔を覗き込んできた。

いつの間にか小走りになっていたらしい。

「えっ？ ううん、何でもないよ」

とうわずった声で答えたときだった。ダンプカーがすぐ横をもの凄いスピードでブッ飛ばして行った。

一陣の風が私たちの間を吹きぬけ、短いフレアスカートを、思いっきりビューンとめくっていったのだ！ それは強風で傘が裏返しになったときによくいう、おちょこ状態に近いものがあった。

とっさに私はスカートをつかんで、しゃがみ込んだが、時すでに遅しの感はぬぐえなかった。ダンプの撒（ま）き散らした土埃の中で、シラ～とした空気が流れていた。

それでも私はまだ、一抹の希望を捨ててはいなかったのだ。

『もしかしたら、あの猛スピードのダンプに気を取られて、ふたりとも、ハイテイナイ事実に関がつかなかったかもしれない』

私は気持をやっとこさ立て直すと、さり気なくスカートをパンパンとはたいて、ふたりと目を合わせないようにおそるおそる歩き出した。

しかしすぐに自分の考えが甘かったことを、思い知らされるのだ。

心もとないひらひらスカートを手で押さえ、妙にギクシャク歩く私の後ろ姿に向かって、K子ちゃんはついに、言ってはならない最悪の質問を投げかけた。

「ねえなおちゃん、どうしてパンツはいてないの？」

ギャァァァー！ やっぱり見られていた！ 私はもうA夫くんの前でバラされたのが恥ずかしくて、カーッと顔が熱くなっていくのがわかった。

「K子ちゃんなんか嫌いだあ～」

私はスカートの裾をしっかりと足の間にはさんで、内股になりながらも脱兎（だつと）のごとく家へと駆け出したのであった。

なんとも情けない話だが、私の「ハカナイ」思い出は、もうひとつある。

北海道には珍しくもないある寒い雪の日の朝、私は紺のコートにマフラーに手袋、長靴という防寒態勢で、通い慣れた中学校へと向かっていた。

学校へ着いて教室に入り、石炭ストーブの暖かさにホッとしながら、いつものようにコートを脱いだ。

なんとなくスースーしている下半身を見ると……！ ヒラヒラしてる真っ白いスリッパが、いきなり目に飛びこんで来たではないか！

な、なんと！ 制服のスカートをはいていなかったのだぁ!!

私は慌てふためいてコートを着直し、ゼィゼィ言いながらボタンを下までしっかりと留めた。念のためにもう一度、コートの襟の隙間から覗き込んで確認したが、やっぱりスカートは影も形もなかった。

さぁ、それからが試練の始まりだった。

急いで公衆電話へ走り、母に哀願した。

「昨日の晩、寝押ししとこうと思って布団の下に敷いたまま、はいてくるの忘れちゃったのよ〜！　すぐ持って来て〜！」

「用事があるから昼までは無理」

母の答えはつれなかった。ガクッ……。

教室へ帰って目立たないように背中を丸めて机に向かっていると、何人ものクラスメートが心配そうに尋ねて来る。

「松井さん、コート着たままよ。どうしたの？　風邪でもひいたの？」

そのたびにコソコソと耳打ちしなければならなかった。

「実は、スカートはいてくるのを忘れたの」と。

最悪だったのは、一時間目、二時間目、三時間目、四時間目と教科によって先生が変わるごとに、

「松井、教室の中では、コートぐらい脱げ！」

と怒られ、

「スカートはいてくるのを忘れちゃったんです。すみません」

と毎回説明して、あやまらなくてはならないことだった。もちろん、そのたびに教室は、ドツとわいた。

ふと横を見れば、憧れの君も大口を開けて笑っている。

もうっ、やけくそになった私は、黒板にでっかく、

「松井は、スカートをはき忘れたため、コートを着用しています」

とでも書いておこうかと思ったくらいだ。

そして、やっと母から紙袋に入れられたスカートが職員室に届けられた昼休み、

「よかったなあ」と先生たちに笑顔で送られて廊下へ出て、私はハタと気がついた。

「五、六時間目は、体育じゃないのよ！」

なんだか、やたらと空しい、一日であった。

ミステリー「留守番電話」

恋をしていると、無言の留守録がやけに気になる。

『ツーツーツー』としか聞こえないのに、どんな気配も逃すまいと耳を澄ませ、
「もしかしてこの音は、あのお方では？」

と何の根拠もなく推理するのだ。

「今日こそ、彼から連絡があるはずだ」と急いで仕事から帰って来て、再生のボタンを押すと、
「ルスロク アリマセン デシタ」。表示板は、愛想がない。

かといって、クタクタに疲れて帰宅したのに、
「ルスロク 十三ケン アリマシタ」

というのも、ゾツとする。友人から『菜桜ちゃん、これを聞いたらすぐ電話ください』なんて入っていたら、無視するわけにもいかない。それが込み入った話なら、当然長電話になってしまうだろう。気が重い。「そのあとお風呂に入ってえ、休むのは三時過ぎるな」と思ったら、なんだか再生するのがいやになり、「帰って来なかった」ことにして布団を被って寝てしまったときもある。

しかし、こんな薄情な私が、友人のありがたみをつくづく感じた「忘れられないメッセージ」があった。

ある夜のこと。いつものように真っ暗なひとり暮らしの部屋へ「ただいま」と戻って来て、再生のボタンを押すと、親友の声で「ハッピーバースデー、トゥユー」の歌が録音されている。
「そうか、今日は、あたしの誕生日だった……」。時計は、もう次に日になりかけていた。

この歳（とし）になると、誕生日はたいして意味をもたなくなってくる。子供の頃のように大騒ぎしてプレゼントをねだるといってもない。ただ黙って何ごともなく、その日が過ぎてゆくだけである。

友は底ぬけに明るい声で熱唱していた。

『ハッピーバースデー、ディア、菜桜ちゃああああん！ おめでと〜！』
「何がめでたいんだか」と照れながら、不覚にもちよっぴり泣けてしまった。

反対に頭に来るのは、いわずと知れた「いたずら電話」である。男の低いあえぎ声が延々と続いていたり、『バーカ！』とだけ言って切れていたり、お菓子なんかをポリポリ食べている音のみが入っていたり、いろいろである。

ところが、悪意のあるいたずらより私を困惑させた、とんでもない留守録メッセージがあったのだ。

引っ越し先の新居に電話がついて一週間ほどしたある日、帰宅した私はその伝言を聞いて、首をかしげた。

『はい、松井菜桜子です。私はただいま留守にしています。恐れ入りますが……』とテープでフルネームを名乗っているのにも関わらず、その女の子はいきなり、
『もしもし、きみちゃん？』

と呼びかけているのだ。

「へ?!」

『きみちゃん、元気い？ またかけまーす』

と言って切れていた。

「あっ、なんだ、間違い電話か」

そのときは、それ以上気にとめなかった。

しかし、「きみちゃんコール」は、それからあとを絶たなかったのである。

『もしもし、もしもし、きみこ？ ツヨシんとこのおばちゃんだけどお、あんたっ、何してんの?!』

連絡もせんでえ!』

「ごめんなさい」と思わずあやまりそうになった。留守電に入っていた二回目の「きみちゃんコール」である。

そのおばさんは、猛烈に怒っていた。

『何度かけてもいやしねえ。みんな心配しとるよおー。ほんとにもうっ、きみこ！ ええかげんにしいや!』

「だからっ、あたしは、きみこちゃんじゃないんだってば」と電話機に向かって言っても、しょうがない。

『そんで話つつうのはよお、あんた、驚くんでねえよ！ 本家のカズオが死んだんだよお。それでえ、あんたに電話してんのに、連絡がとれんで、もうっ……（泣きが入る）。あたしや、ほれ、なんつうの？ ほれっ、この留守番電話？ こいつがもう苦手だからよお、も〜どうしようかって。……………それはそうと、これって、ちゃんと録音されてんの?』

というおばちゃんの疑問が生じたところで『ピー』。制限時間いっぱいである。彼女はシステムをよくわかっていなかったのか、かけ直そうとは思わなかったようだ。「だから、あたしや、こんなもん嫌いなよ!」というおばちゃんの怒りの声が聞こえてきそうであった。

電話機の前で、私はどうしていいのかわからず、アタフタした。先日の女の子の、なんてことないメッセージならいざ知らず、今回は「本家のカズオが死んだ」のである。

「きみちゃんに、すぐ知らせなきゃー」と思った。

しかし、「どこへ?」。だいたい、きみちゃんって「だれ?」。

それにしても、同じ人あての間違い電話が二本続くということは、いったいどういうことなのだろう?

その夜、私はベッドの中で考えた。答えは単純なことだった。

「そうか、きみちゃんは、この電話番号の、前の持ち主なんだ」

住所が変わると、電話番号も変更になる。引っ越し魔の私は、何回も電話番号を変えていて、友人や親戚から「アドレス帳のあんたの欄が、もう書ききれなくなって真っ黒よお、いいかげんにして」と言われていた。

今回の引っ越しで、NTTから私が指定された番号を、この区内に住んでいた「きみちゃん」がかつて使っていたのだ。これだけみんなが電話を持つようになれば、電話局が新しい番号を作るのにも限界があるだろう。一回使用された番号を渡されても不思議はない。

「あのおばちゃん、きみちゃんと連絡ついたのかなあ」
そんなことを考えながら、いつの間にか寝てしまった。

それからしばらくしたある日のこと、またまた「きみちゃんコール」が録音されていた。
『もしもーし、きみちゃーん、元気ですかあ？』

若い女の人の声だったが、どうも前の女の子ではないようだ。

何度も言うようだが、私は『はい、松井菜桜子です』としっかり最初に名乗っている。どいつもこいつも、人の言うことを聞きゃあいない。揃いも揃っておっちょこちょいばかりなのか？ そんなに私の声はきみちゃんに似ているのか？ 「いいかげん、誰だ気づけよ」と私はあきれた。

そんなこっちの気も知らず、能天気なメッセージは続いていた。

『きみちゃんにずーっと会ってないので、どうしてるかなあって、うちの人と話してたのー。じゃ代わりまーす。ほらっ、あなたあ、早く早く』

今度は、夫らしき男が出て来た。

『あー、久しぶり、どうしてですか。ふたりで仲良くやっていますか？ じゃ、タカシくんにもよろしく』

タカシくん？ 誰だそりゃ。初登場の男の名前に私は「ん？」となった。電話はまた奥さんに代わっている。

『あなたたちも暮らし出して長いんだから、もうそろそろ結婚したらあ？ なんてね。（『おいっ、余計のこと言うな！』と奥から夫が怒っている声あり）。はいはい。それじゃ、今度ふたりで遊びに来てくださーい』

とにぎやかに終わっていた。

「暮らしだして長い」「そろそろ結婚」。この奥さんの口ぶりからすると、少なくともこの電話番号の時分には、きみちゃんはタカシくんという人と同棲していたらしい。

「やるじゃん、きみちゃんも」

何が「も」なのか自分でもよくわからなかったが、同世代であろう「きみちゃん像」の輪郭がぼんやり見えてきて、私は少しずつ「知り合い」のような気がしてきた。

その後も、きみちゃんへの留守録はいろいろな人からあった。

『きみちゃん、今度のバレエの本公演はいつですか？ チケット買いますから教えてね』

これには、「えっ、彼女って、もしかしてバレリーナなの？」とちょっと驚いたものである。
タカシくんあてのメッセージもあった。

『〇〇編集部のヤマシタです。原稿の締め切りについては、追って連絡いたします。それでは、きみこさんにもよろしくお伝えください』

「それじゃ、彼はライターなのか？」。ますますふたりに興味が湧いて来た。

バレリーナとライターの横文字カップルなんて「チェッ、カッコイイじゃねえかよ」。

そんなある日のこと。久しぶりの休日に私は寝坊を決め込んだ。こういうとき、必ず一本の電

話が、気持のいい眠りをぶち壊すのである。

「もしもし」と電話に出ると、相手はうんともすんとも言わない。「なんだよ、いたずら電話か」と思い、切ろうとしたら、

「もしもしい？ これ、留守番電話かあ？」

というおばさんの声がした。

「いいえ、違いますけど。あの、どなた……？」と言うが早いか、そのおばさんは突然怒り出した。

「やっと捕まったか、きみこっ！ おめえ、どこ行ってたんだあ?!」

このめちゃくちゃ特徴あるしゃべりには、聞き覚えがあった。あのきみちゃんの田舎のおばちゃんである。

「きみこっ！ なんで電話してこねえんだっ！」

彼女は私をきみちゃんだと信じて疑わない。

「あの、あの、私、きみこさんじゃないんです」と口をはさむのがやっとだった。

「きみこじゃねえって、じゃ、あんた、だれ？」

おばちゃんは拍子抜けしたようだ。

「えー、名乗るほどの者でもないんですけど、あの、きみこさんの、次の、電話番号の持ち主なんですよね、私。で、きみこさんは引っ越ししたらしくて、番号が変わっちゃったと、こういうわけなんですけど……」

「……………」。相手は無言である。

「あの、言ってる意味、わかりました？」。おずおずと尋ねてみた。

「そしたらあ、あんた、きみこの引っ越し先の電話番号教えてちょうだいよ」

案の定、ぜんぜんわかっていない。

「私は、それ、知らないんです。電話局に聞いてみたらどうですかあ？」

それでもおばちゃんは、引っ込まなかった。

「だってえ、きみこは、そこに住んでいたんでしょが！」

ああ、だめだこりゃ。

「あのですねえ、電話番号が同じなだけで、住んでいた所は、違うわけです。えーわかりますか？」

おばちゃんの理解の範疇（はんちゅう）はとっくに超えていた。

「そんじゃあんた、きみこから連絡があったら、本家のカズオ（出た！）の四十九日だから、こっちにもかけるように伝えてもらえんかねえ」

と言って、彼女は一方的に電話を切った。

私は、深いため息をついた。

その夜、「きみちゃんコール」はまたかかってきた。今度は若い女の子である。

「きみちゃん？」との問いに、私もさすがにうんざりした。

「違います！ こういう電話がしゅっ中かかってきて、も～すっごく迷惑してんですよ！」

ヒステリー気味に言うと、その女の子は意外なことを呟いたのだ。

「そうですか。彼女、引っ越したんですね。じゃやっぱり、別れたんだわ」

よせばいいのに、最後のひと言が引っ掛かった私はつい、話に首を突っ込んだ。

「あ、あの、別れたって、きみさんとタカシくんが、ですか？」

「ええ、ずいぶん前に電話したときに、うまくいってないのよって。……えっ？ どうしてあなた、タカシくんをご存じなんですか？」

私も余計なことを言ったものである。この不審そうにしている相手に、いきさつを説明しなくてはならなくなった。ひと通り聞いた彼女は、

「そうだったんですか。そんなことってあるんですねえ」

と気の毒がってくれた。そして、話し好きなのか、見ず知らずの私にやけに馴れ馴れしくしゃべり続けたのである。

「それでね、きみこったら、そんときの電話で、ひとり暮らしに戻るかもしれないって言ってたんです。だけど、その様子が、こう、なんとなく淋しそうでね。あの子、なんか困ったことがあっても人に頼らないタイプだから、ほんと、心配だわ、私」

「心配ですよね……」

「にわか友達」のふたりは、きみちゃんをめぐって妙にしんみりとした。

彼女はその後、「あっ、これ長距離なんで」とバタバタと電話を切ってしまった。

私には、ひとつ気になることがあった。それは、親戚の不幸を田舎のおばちゃんが知らせた、という点だ。『もしかしたら、きみちゃんの両親は、すでに亡くなっているのかもしれない』

頭の中で、ありがちな三文ストーリーが出来上がっていた。

……上京したきみちゃんは、子供の頃から習っていたバレエで身を立てる。そして、いくつもの苦労を重ねてプリマになった彼女は、ある日、雑誌の取材を受けるのだ。そのときの記者が、タカシくんであった。恋が芽生え、この都会の片隅で寄り添うように暮らし出したふたり。天涯孤独のきみちゃんは「この愛だけは失いたくない」と心から願うのだった。ああそれなのに、きみちゃんが海外公演に行っている留守中に、タカシくんは……。

私も、かなりヒマ人である。

しかし、なぜ、きみちゃんは引っ越したことを、みんなに連絡しなかったのだろうか？ せめておばちゃんぐらいには、知らせといってもよさそうなものである。そうしたら、こんな騒ぎにはならなかったのに。

それにしても、バレリーナのきみちゃんと絵に描いたような田舎のおばちゃんは、親戚とは思えないほど、イメージにギャップがあった。きみちゃんは、そんな自分の故郷や生い立ちを嫌って、わざと疎遠にしているのかもしれない。

「いや、それとも……」。私は、ふと、いやな予感がしてきた。もしかして、きみちゃんには、連絡したくてもできない、なんらかの事情でもあるのではないか？

私の想像はまたもや膨らんでいった。

……病気なのか？ あるいは悪質な借金取りに追われているとか。いや、彼と別れたショックからまだ立ち直れないのかもしれない。それで、世をはかなんで……まさかね。……そうだ！ 何かの犯罪に巻き込まれた可能性だってある！ ……なーんて、ちょっと考えすぎか……でも……。

一瞬、背筋がゾクッとした。間違いなくワイドショーとサスペンス劇場の見すぎであった。

それからしばらくの間、「きみちゃんコール」はなぜかパツタリ途絶え、私はその名前も忘れかけていた。

だから先日、『もしもし、きみちゃん？』というメッセージが聞こえて来たとき、なんだか懐かしい気すらした。

『今日の待ち合わせ、急な用事で行けなくなっちゃったのよ！ ゴメン。この埋め合わせは後日、絶対するから、そいじゃね』

良かった。きみちゃんはこの東京でちゃんと生きているようだ。

女の子はひどく慌てていた。どうやら間違えて、前の番号にかけてしまったらしかった。

「ひでえなあ、当日キャンセルかよ」

ということは……きみちゃんは待ちぼうけをくらうってわけか？

そうはいつでも、例によって、私にはなすすべはなかった。

どこかの街角で、来るはずのない友達を待ち続けるきみちゃんの淋しそうなシルエットが浮かんで、私は胸がキュンとなった。

きみちゃんは今、幸せだろうか。一度も会ったことがない、この先一生会うことがないであろう彼女の行く末を、電話機を見つめながら案じる私であった。

P・S きみちゃん、お願いだから、田舎のおばちゃんには連絡してやって！

食えないヤツ

思い出すたび、口につばが溜まってくるほど美味しかった食べ物がある。

北海道の厚岸の浜で、海水で洗って食べたプリプリした牡蠣、マウイ島のクラロッチってところで焼いてる素朴で香ばしいパンケーキ、福岡で初めて食べたフグの唐揚げなど、言い出したらきりが無い。

しかし反対に、二度とお目にかかりたくない、思い出すたびに胸のあたりがムカムカして、腹がたってくるほどまずかった食べ物がある。私は今までに二回、遭遇している。

ナマコだろうがホヤだろうが、タندرろうがハツだろうが、私はおかずとして食卓に出されたら喜んでいただきまーすっ、してしまう。ほとんど好き嫌いのないやつなのだ。しかしこの私が、どうがんばってもふた口目にチャレンジする気になれなかった世にも恐ろしい食べ物があった。

それは、小学四年生の、とある日の給食にメインディッシュとして出された黄土色の紐状の不気味な食べ物だった。

黒板の横に貼ってある「今月の給食献立」の紙には、その問題のおかずの名前が書いてあった。題して「切り千し大根のピーナツバター和え」

聞いただけでなんだいそりゃ?!って感じでしょ。まあ、文字通りてんこ盛りの切り千し大根をピーナツバターで和えてある単純な料理なのだが、戻しが足りなくて切り千しが異常に固い。その上、めちゃくちゃもったりと甘いペースト状のピーナツバターが口に粘りついて、私は食べたたん「ぐえっ」となってしまった。

いやっ、それは、私だけではなかった。教室のあちこちから、悲壮な声が次々と上がったのだ。

「何だよ！　これは？」

食べ盛りの男の子達ですら、カチャンッと、先割れスプーンを投げ出して怒っている。

女の子は、「やだあ〜、もう食べられないっ！」と泣きがはいていた。それほど、言語道断に「オエエエ！」だったのである。

だいたい、こんなもんをどこの誰が考えだしたのか。切り千しとピーナツバターという、とうてい縁のなさそうな組み合わせは、どこをどうしたら思いつくもんなのか。私は不思議ではなかった。

さっき無理やり飲み込んだ切り千しがまだ食道をいきつ戻りつしているようである。私は胸が苦しくて身動きができないまま、アルミのボールに入ったこの得体の知れない物体を茫然と見つめていた。そこへ、

「おいっ、学級委員、なんとかしろよっ！」

という、声が起こった。そして「そうよ、そうよ！　なんとかしてよ」とみんなが賛同し始めた。

「え〜?!　なんとかしてっただって。・・・どうすりゃいいのよ？」

なにを隠そう、その時の学級委員は私だったのである。

「だからあ、先生のところへ行って、こんなもの食べられないって言うんだよっ」

当時、うちのクラスの担任は若い男の先生で、昼食は私達とはとらずに、職員室で愛妻弁当を食べていたのである。自分は食べないくせに、先生が作った「給食のきまり」はこまごまといろいろあった。その中に「一度よそったおかずは、残さずきれいに食べましょう」というのがあったのだ。

「全部食べるなんて、とっても無理」という結論に全員が（ひとりも欠くことなく）達していた。

普通、味覚は人それぞれとか好きずきなどというが、これをみても「切り干し大根のピーナツバター和え」がいかにも不評だったか分かるうというものである。

私は先生に味見させるために持たされた、アルミのボールを抱え、「頼むわよっ」「がんばれ」というクラスメートの励ましの声を背に、職員室へと向かっていた。

廊下を歩きながら、「いやっ、全部食べなきゃダメだ」とか言われたらどうしよう、なんて考えてずんずん気は重くなっていった。それでもクラスの代表として一致団結した意見を伝えるに行くという、これぞ学級委員！の使命感に燃えてもいた。

さて、愛妻弁当の箸をとめた先生は、私の説明を聞いた後でぶつぶつ言いながら一口食べると、「うっ」と唸ったまま黙り込んでしまった。

そしてあんがいあっさりとして、

「うん、半分食べればいい」

と答えたのだった。

いやしかし、その「半分」ですらけっこうシビアなもんだった。それを証拠に、20年以上たった今でも、「切り干し大根のピーナツバター和え」の味をはっきりと覚えていて、この文章を書きながら蘇る胸やけしそうな食感に、どんどん気持ちが悪くなってきたのだから。ウ～ッ、ムカムカする～！

けれどもあれはたぶん、栄養学上はとてもバランスのとれた良い食物だったのだろう。食物繊維もたっぷりだし。

だが、悲しいことに、ただそれだけ、ただそれだけだったのだあねえ。

二つ目は、5年前に神戸で出会った。

翌日に控えた友人の結婚式に出席する為に、私は、三宮の洒落たホテルにチェックインした。

新幹線の中で眠りこけてお昼を食べそこなった私は、猛烈にお腹が空いていた。

しかし、夕食を新婦の御両親にご馳走してもらえることになっているから、今しっかり食べてしまうのは、非常にもったいなかった。

「よしっ、なんか軽いもんにしとこう」と、ホテルの中を散策したのだが、レストランも日本料理屋も値が張りそうだわ、ボリュームがありそうだわで、敷居が高い。

やっと可愛いパーラーを見つけて、喜びいさんで入っていくと、客は私一人であった。

渡されたメニューには、オレンジジュースとかチョコレートパフェとかショートケーキなど

といった飲み物やデザートは、ずらっと並んでいるのに、肝心の「軽食」が見当たらない。私はしょっぱいものが食べたかったのである。

なんとなく今さらそこを出て他を探すっていうのも気がひけた私が、ぎりぎりの妥協をして注文したのは、その店唯一のごはんもの「フルーツカレー、1200円」であった。

「なんだ、探せばあるじゃん」やれやれとホッとしていると、ウェイトレスの「あのお～、フルーツカレーだそうです」と、なぜか遠慮がちに厨房にオーダーを伝える声が聞こえ、続いて奥から「えっ、フルーツカレー?!」ほんとかよ?という顔でコックさんがこっちを見ながら頭を出した。

ウェイトレスは、仲間同志でなにやらとソヒソと話しをしている。切れ切れに分かった言葉は「珍しい」と「初めて」と「・・・おるんやねえ」であった。

『なっ、なんだっていうのよォ～！ フ、フルーツカレーってえのは、カレーに、ただフルーツが入ってるヤツなわけでしょう？ 違うのお?!』

実際には食べてみたことのなかった私は、とたんに自信がなくなってきた。

しばらくして、店中の視線を集めつつ問題の「フルーツカレー」が厳かにテーブルへ運ばれて来た。それはごく普通の銀色のソース入れに入ったカレーと、皿に薄く盛ってあるごく普通のライスのように見えた。

しかし油断はできない。なにせ私は、興味深々といった面持ちの従業員全員の注目を浴びるほどのものを、注文したらしいのであるからして。

器の中の大きいスプーンでカレーをかき混ぜてみて、わたしゃ、驚いた。色とりどりのフルーツで、ぎっしりうまっていたのである。

想像していた「普通のカレーにちょっぴりバナナやりんごのはいったもの」というのとは、かけ離れた代物だった。

いや、バナナもりんごも入っていたし、パパイヤ、西瓜、キウイ、苺、アボガド、メロン、オレンジ、巨峰、マスカットがひしめきあうように入っていたが、それしか入っていなかったのだ。くだものだけしか。

おまけにそれらはカレーの中で煮込まれているというのではなく、今切ったばかりのフレッシュでジューシーなやつをカレー汁であえたもの、といった感じであった。

カレーソースの器を触ってみると、ひんやりと冷たい。

中の具をスプーンですくって、ごはんにかけてみた。くだもの達は食べるのが気の毒なぐらい、カレーにまみれてグッタリとしている。どうみても、「まずそお～」であった。

おそるおそる一口食べてみると、思った通り「ゲェ～！」である。

フルーツの甘く酸っぱい汁が、カレーソースと不気味な不協和音をかもし出している。いろんなものがごちゃまぜになった香りが、口いっぱいに広がった。

一言でいえば、「生ゴミ」味、だ。（「お前は生ゴミを食べたことあるのか?!と突っ込まれると困るけど）

さて周りでは、いつのまにか現れた蝶ネクタイの支配人ふうの男の人まで加わって、無関心を装いつつ私の挙動に注目していた。なるほどこいつは「頼んだ奴の顔が見てみたい」食物である。（そんなもんメニューに載せんじゃねーよっ…）

しかしこういう時、私は悪いクセで、なぜか妙な見栄を張りたくなってしまうのであった。「あのお～、こんなだって知らなかったんです私」と、うろたえるのが、くやしくて、ただそれだけで訳の分からないファイトに燃えてしまうのである。

ましてやここは、一応名の通ったホテルのお洒落なパーラーであった。口に合わないを残してしまうのは、イコール味オンチの田舎者と思われてしまうような気がしたのだ。くだらないって言っちゃあ呆れかえるほど超くだらない行為なんだけど、私はなんだかテレビ東京の「テレビチャンピオン」（大食い選手権とかゲテモノ食い選手権大会などをやってる）の挑戦者のような気分になっていた。

「よ～しゃっ！ 東京もんの底力見せたるかあ～い！」（正確には北海道生まれだけど）

「フルーツカレーなんて、毎日のように食べてるざんす」

というシチュエーションで、（途中何度か、胃と食道の間で逆流現象が起こったものの）生ゴミ味のカレーを、私は笑顔できれいにたいらげたのだった。

ウェイトレス達は、驚きの表情で私を見つめていた。

だが実際には、もうそんなことはどうでもよくなりつつあった。気持ちの悪さが限界にまで達していたのである。

『はっ、早く、部屋に戻りたい』

それでもこんな情けない状態になってるなんて、いまさら気取られなくなかった私は、極力軽やかな足取りでレジへ行きお金を払った。

そして「さあ、このドアを開けて、走って帰ろう」という時、後ろからそっと誰かがにじり寄ってきたのを感じた。

「お気に召していただけたでしょうか？」

支配人がにこやかに立っているではないか。フルーツカレーを美味しそうに全部食べた数少ない、物好きな客の感想を聞いてみたかったのに違いない。

私は、正直に「なんじゃい！ ありゃ！」と、胸ぐらを掴みたい気持ちだったが、有終の美？を飾ろうと、グッとこらえて、

「ええ、大変結構でした」

と優雅に答えたのだった。たぶん顔面は蒼白だったと思うが。

すると支配人は、

「お泊まりの方ですか？ それではエレベーターまでお送りしましょう」

と一緒に歩きだしたのだ。

ここまでゲロゲロになっている私が、平静さを取り繕って笑顔で対応するのは、並大抵のことではなかった。

エレベーターの扉が開まった瞬間、私はドサッと床に崩れ落ちてしまった。

そして、駆けこむように部屋へ入って、ベットへ倒れ込み、

「う～んっ、う～んっ、きぼぢわるいよおおおおおおおー！」

と一時間以上も七転八倒するはめになってしまったのである。

その夜の新婦の御両親との食事も、いまいち食欲がわかず、出されたデザートのみロンに至っ

ては、ウツとこみ上げるものさえあった。

「あ〜、バカなことした」

と生ゴミのにおいを嗅ぐと、今だにこみ上げてくる、フルーツカレーの甘く苦い思い出である

。



一杯のラーメン

駅の立ち食いそば屋には、「どんなに急いでお腹が空いてても、ひとりではちょっと入りづらい」と言う女性が多いが、私は全然平気でガンガン暖簾をくぐってしまう。そして、「おじさん！ 天玉、うどんをお願いっ」

などと注文して、サラリーマンの間に混じり、ふうふう言いながら猛スピードで食べてしまうのだ。

安い早いうまい系のお店は大の得意、どんと来いである。回転寿司はもちろん、立ち食い寿司（これがヘタな寿司屋よりおいしかったりする）、牛丼屋、スタンドカレーの店、屋台のラーメン屋に至るまで、私が気遅れしてひとりで入れない店はほとんどないと言っていいだろう（だからどうした？ と言われると困るが）。

それらの食べ物屋のいちばんのメリットは、なんてたって「出てくるのが早いこと」である。次の仕事への移動時間が少ししかなくて、なおかつ、お腹が空いてて死にそうなとき、ハンバーガーやサンドイッチじゃ物足りないなあというときにも、力強い味方になってくれる。

その辺の回転寿司に飛びこみ、お茶をすすり、二、三皿でも詰め込めば、それだけでずいぶんお腹が落ち着く。仕事への新たなパワーも出て来るといふものだ。

そしてまた、そういった類いの店は、女の子のひとり客は比較的珍しいらしく、バイトのおにいさんが牛丼の具をちょっぴりふんばつしてくれたりして、「ウフフ」と小さな幸せに浸れることも、ときにはある。

今では、こんなに図太くなってしまった私だが、これでも東京へ出て来たばかりの頃は、周りの目を気にしながら緊張してひとり、食事をとることもあった。

そんな若き日の食べ物にまつわる、懐かしい話がある。

その店は立ち食いではないが、駅のガード下にある（やはりちょっと女性は敬遠しそうな）さびれた感じの中華料理屋だった。

看板の「ラーメン250円」という文字に引かれて、扉を開けた瞬間、「あっ、入るところ間違えたかもしれない」と私は後悔した。だってそこには、店構えよりもっと薄汚れた暗いムードが漂っていたのだ。

それでも、カウンターの奥にいる調理場のおにいさんが、不似合いなほどの明るさで、「いらっしゃいっ！」

と威勢良く迎えてくれたので「まっ、お腹がいっぱいになればいいや」と、私は気を取り直した。

さて、席へ着こうと周りに目をやると、三、四人の作業服姿の男の人がまるで珍しい物でも見るように箸を止めて、こっちをジロジロ見ているのに気づいた。

「やっぱりここに、ショートパンツとポニーテールといういでたちは不似合いだし、はっきりい

って私はかなり浮いてる」

しかし、今さら引き返す勇気もなかったので、なるべく端のテーブルへ着くことにした。

店の主と呼ぶにふさわしい不愛想なおばさんに「ラーメンください」と、蚊の鳴くような声で注文すると、オーダーを伝え聞いたおにいさんは、奥から、

「はいよっ、了解！」

と相変わらず元気がいい。

しばらくして、おばさんがラーメンを運んで来た。それは何の変哲もない、ナルトやネギや支那竹や焼豚が入った、ごく普通の醤油味のラーメンだったが、空腹の私には胃にジーンと染みるほど美味しかった。

ところが、ズルズルと食べ進むうちに、丼の底に何かグニュッとした柔らかいものがあるのに気がついたのだ。箸でつついてみると、そこにはたしかに弾力のある不気味な物が潜んでいるようだった。

「ゲッ、ラーメンの中に何か入ってる！」

ごく最近そば屋で、食べていたカレーうどんからゴキちゃんを発見した経験を持つ私は、嫌な予感でいっぱいになった。

「変なものだったらどうしよう？」と。

それでも一目見たいという誘惑には勝てず、丼の底からその物体をおそろおそろ引っ張りあげた。

すると……それは！ 美味しそうな分厚いチャーシューだったのである。

ゆっくり箸で探してみると、出るわ出るわ！ チャーシューの嵐！ 丼の底にびっしりと隙間なく敷き詰められていたらしい。

びっくりして私が顔を上げると、調理場のおにいさんがにっこり笑ってVサインを出している。彼の仕業に違いなかった。

ラーメンを運んで来たおばさんはまったく気づいていないようで、さっきからずっとテレビにくぎづけである。そりゃそうよ！ 見た目はごくごく普通に作ってあるんだから。

どこかの地方の名物に「幽霊寿司」という名のちらし寿司があって、それは白いご飯のいちばん下に、いろいろな具がこっそり隠してあるものだという。その昔、贅沢な寿司を食べていると知られないように、庶民が考えついたらしい、というのを聞いたことがあるが、思えばこのラーメンと同じような発想である。幽霊寿司に対抗して、これは何と名づけよう？ 「裏チャーシュー麺」というのはどうだろうか。まんまやんか！

当時、一日の食費を「目指せ500円」で頑張っていた私にとって、チャーシュー麺と普通のラーメンの200円の格差は、それは大きなものだった。タクシーに乗って帰ろうなどと思いつかないのと同じに、それを食べようなんて考えたこともなかった。

汁をレンゲで口に運びながら、胸がいっぱいで涙と鼻水が出てきた私は、顔を上げることができなかった。

そして次から次へとまるで魔法の丼から出て来るようなチャーシューで、お腹もいっぱいになって来た。

だが……、はっきり言って、それはあまりに多すぎた。

「もういいっ！」

と思っても、まだまだ丼から噴きだして来るのだ。いくら憧れの「チャーシュー麺」といっても、ものには限度がある。

「きっ、気持ちが悪くなりそう〜っ」。感動の涙がいつしか、苦悩の脂汗へと変わっていった。

しかし、ここで残しては「女がすたる」。あの明るくVサインを送ってくれたおにいさんの好意を無にすることになる。調理場でチャーシューがいっぱい残った丼を洗いながら、

「ケッ、人生なんてこんなもんよ！」

と次の日から世をすねた暗い人間になられても困ってしまうのではないか。私だってそれぐらいの、一飯の恩義はわかっているつもりだ。

私はガンバツた。他ではけっこういい加減なところも多いが、こういうときには踏ん張りがきくのだ。

すでに喉元までチャーシューで埋まっていたが、最後の一枚を無理やり水で押し込んだ。

ふと見ると、奥からおにいさんがこっちを向いて、うれしそうに笑っている。口から飛び出そうなチャーシューを手で押さえながら、私は精一杯の笑顔を作って会釈した。

そしてふらふらとおぼつかない足取りで、ラーメンの代金250円をおばちゃんに渡すと急に、「チャーシュー分は本当にいいのだろうか？」という気がしてきた。ちょっと申し訳なさそうに振り返ると、おにいさんは真面目な顔で大きく頷いた。それは「いいから早く行け」という意味のようだった。

私はまた軽く頭を下げ（「ウツ、出そう！」になりながら）、店をあとにしたのであった。

あれからもう何年も経つが、あんなにびっくりして感動させられた食べ物には、それ以来出会っていない。

菊池通隆のこんなはずじゃなかった

ピー。

「こんばんは、松井菜桜子です。えー今日はちょっと御機嫌伺いの電話をかけてみました。また電話します」

ピー。

な、なんだ？ 御機嫌伺って？ ……あ！ ま、まさかエッセイ集の仕事が遅れていることがバレたのか!?

なんでバレるんだ？

あ、あたりまえか、そんなこと。

菜桜子さんは今回の仕事の中心にいるんだから。

な、なんか電話の向こうの菜桜子さんは明らかに笑っていなかったような……気がした。

これはマズイっすよ。

思えば松井菜桜子という人の文章を見たとき、口語体で読みやすく、なおかつオチが所々に効いているそのさまに、いたく感心させられたのを覚えている。

楽しい文章を書くなあ。

その少し前からエッセイ集の企画が自分の中にあった。そこでこの人でいってみようと思い本人に聞いてみたところ快く承諾してくれたので、この企画は動き出すこととなった。

実をいうとこの本に収められているエッセイのほとんどは、企画がスタートしてからかなりの短時間で書き上げられたような気がする。

これには僕もそうだったが、担当の鈴木さんも驚いていた。

よっぽどだったんですねえ。

なにが？

そうこうしているうちに『電撃王』でも連載が始まったりなんかして。

ある日ふと気がついた。

たしか、この企画が始まったときは「オシャレで午後のティータイムなんかに女性のセカンドバッグからチラリと覗いている本」というものではなかったか？

「波乱万丈な人生を送っているんですねえ」

ある程度まとまった原稿を読んだ後の素直な感想が口からでる。

「そうでしょうか」

と菜桜子さん。

キョトンとしている。

いやそうですよ、菜桜子さんの人生に比べれば僕のそれなんて平穏なものでしたよ。

仕事に関していえば、超波乱万丈だけど。

このエッセイを読むと思わず、口元が笑ってしまう。

これほどまでにオチがちゃんとしているエッセイが今まであったろうか？ いやない!!

本当にこんなすばらしいオチが用意されていたんでしょうか。

菜桜子さんの日常に。

ただズラズラと起こったことを書き綴るエッセイは、この本を見て勉強したほうがいいね。

なぜならオチは基本だもの。

全てにおいて。

クリエイティブな仕事をしているならなおさらですよ。

付け加えるなら、このエッセイのすばらしいところは笑いだけじゃなく、所々に見え隠れするペースで、それがいい味を出していると思う。

たとえるならそれは、クレイジーキャッツの映画でドタバタの合間にふと見せる植木等の憂いを含んだ瞳であったり、『男はつらいよ』のなかで寅さんが見せる真剣な表情に、通じるものがあるのではないか。

そうだとしたら、最初にあったオシャレな本なんて跡形もなく吹き飛んでしまう。

人間の真実の生き様の前に、見栄えだけを気にかける飾り物になど対抗する術（すべ）はないのだ。

これでいいのだ!!

「松井菜桜子です。おはようございます」

「あ、こんばんは」

「は？ なに言ってるんですか。まだ、朝ですよ。そういえばエッセイ集の後書きができたそうで」

「え？ あ、ああ。ええ。そうですねえ。今やっているところです」

こうなるとただの作家と編集の会話である。

「そうですか。楽しみにしています。出来上がったらファックスで送ってくださいね」

電話の向こうの菜桜子さんは、おもいきり顔に笑みを浮かべているような……気がした。

「なんてこったい!？」を書いたのは、もう十数年前。

当時、実はタイトルを「何様のつもり?!」にしたかったのだけれど、既にナンシー関さんの著作があるのを知り、変更したという経緯があります。

書き上がってみたら、「何様?!」と言われるほどの内容ではなく、情けない「トホホ」な青春エッセイになっていたのでもう「なんてこったい!？」にして良かったなあとは思っています。

「インタビュー形式にしては？」という出版社の提案を断り、執筆中は昼間はアフレコやナレーションの仕事をし、夜中はワープロに向かう日々を半年続けました。

睡眠時間が削られて身体はしんどかったけれど、小学生の頃から書き溜めた日記をめぐりながら「書きたいこと」が形になっていくのは楽しかったです。楽しくて楽しくて、気がつけば規定ページをオーバーしていたほどでした。

今回は、そんな事情で泣く泣く諦めた「食えないヤツ」「一杯のラーメン」「ハワイ親孝行旅行<日記編>」の未発表の3作も掲載していただきました。「一杯のラーメン」はその頃流行っていた「一杯のかけそば」を意識したものです。後者のお話と同様に感動物語のつもりだったのですが、何故か私の場合はラストに「トホホ」がもれなく付いてきます。

そういえばこの「なんてこったい!？」を読んだ雑誌の編集長さんから「普通、エッセイを初めて書くと誰でも『人生の教訓や説教じみたもの』がどこかに必ず出てきてしまうんだけど、これにはそれが全く無いのが凄い！自分を俯瞰で見られないとなかなか出来ないのよ」と褒められたことがありました。（褒めてるのか?!(^_^;)）

元はといえば「トホホ」な日常のせいなのですが、かなり嬉しかったことを憶えています。

だって、「こんなトホホなヤツがいるんだなあ」と笑って、読者の方が日頃の憂さをひととき忘れる本が書きたい、というのがエッセイ集を書く目的でしたから。

そして十数年の時を経て、この本がまた形を変えて明るい場所に置かれるかと思うと胸がいっぱいです。

最後に、今回電子書籍版の話を推し進めてくださった大沼先生、掲載写真を探し出し提供してくださった麻宮先生、諸々の許可を取り付けてくださった編集の鈴木さん、メディアワークスさま、ありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。

そしてなにより、この本が読者の方々と再び出会えたことに、感謝感激です。最後までお読みいただきありがとうございました。

実は私、また「書きたいこと」が溢れ出してきています……。今。